

琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う

栗東町高野遺跡発掘調査報告書

1987.3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う

栗東町高野遺跡発掘調査報告書

1987. 3

滋賀県教育委員会
財團滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました、地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田志農夫

例　　言

- 本書は琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う高野遺跡の発掘調査報告書で、昭和60年度に発掘調査し、昭和61年度に整理したものである。
- 本調査は滋賀県道路公社からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
- 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
- 本事業の事務局は次のとおりである。

昭和60年度

昭和61年度

滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原 浩	文化財保護課長	服部 正
課長補佐	中正輝彦	課長補佐	山口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通	埋蔵文化財係長	林 博通
・ 技師	用山政晴	・ 上任技師	用山政晴
管理係主任	山本徳樹	管理係主任主任	山本徳樹
滋賀県文化財保護協会			
理事長	南 光雄	理事長	南 光雄
事務局長	江波弥太郎	事務局長	中島良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋	埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査二係長	田中勝弘	調査二係長	大橋信弥
・ 技師	平井美典	・ 二係技師	平井美典
総務課長	山下 弘	総務課長	山下 弘
・ 主事	松本暢弘	・ 主任主事	松本暢弘
・ 啓託	上山美笑子	・ 上事	泉 良子

- 本書の執筆・編集は、調査担当者平井美典が行なった。
- 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序

例言

1.はじめに.....	1
2.位置と環境.....	2
3.調査の経過.....	3
4.調査の結果.....	4
(1)発掘調査.....	4
S H 1	4
S H 2	5
S H 3	5
S H 4	6
S H 5	7
S H 6	7
S H 7	8
S H 8	8
S H 9	9
S H 10	9
S H 11	10
S H 12	10
S H 13	11
S H 14	11
S H 15	12
S H 16	12
S H 17	13
S H 18	13
S H 19	13
S H 20	14
S H 21	14
S B 1	15
S B 2	15
S G 1	16
S K 1	16
S K 2	17
S K 3 + 4	17
S K 5	17
S K 6	18
S K 7	18
S K 8	19
S K 9	19
S K 10	19
S K 11	20
S K 12	20
S K 13	20
S E 1	20
S D 1	20

S D 2	21	落ち込み 2	21
S D 3	21	落ち込み 3	22
S D 4	21	旧河道	22
S D 5	21	S R 1	23
落ち込み 1	21	その他の出土遺物	23
(2)試掘調査			23
5.まとめ			24

挿図目次

第1図. 周辺の遺跡.....	2
第2図. トレンチ配置図.....	3

図版目次

図版1. T 1・4 トレンチ遺構図
図版2. T 2・5 トレンチ遺構図
図版3. T 3・6 トレンチ遺構図
図版4. T 3・6 トレンチ遺構図
図版5. SH 1・2 実測図
図版6. SH 3, SD 2, 落ち込み 1・2 実測図
図版7. SH 4 実測図
図版8. SH 5・6 実測図
図版9. SH 7・8 実測図
図版10. SH 9・10 実測図
図版11. SH 11・12 実測図
図版12. SH 13 実測図
図版13. SH 14・15 実測図
図版14. SH 16・17 実測図
図版15. SH 18 実測図
図版16. SH 19 実測図
図版17. SH 20・21 実測図
図版18. SB 1 実測図
図版19. SB 2, SK 13 実測図
図版20. SG 1, SK 10・11 実測図

- 図版21. SK7・9実測図
- 図版22. SK1・3・4・6・8実測図
- 図版23. SK12実測図
- 図版24. 試掘トレンチ土層柱状図
- 図版25. 出土遺物実測図 SH1, SH2
- 図版26. 出土遺物実測図 落ち込み1, SH3
- 図版27. 出土遺物実測図 SH4, SH5, SH7
- 図版28. 出土遺物実測図 SH8, SH9, SH10
- 図版29. 出土遺物実測図 SH11, SH12
- 図版30. 出土遺物実測図 SH13, SH14, SH15, SH17
- 図版31. 出土遺物実測図 SH18, SH19, SH20, SH21, SB1, T6トレンチP15
- 図版32. 出土遺物実測図 SD2, SD3
- 図版33. 出土遺物実測図 SD4
- 図版34. 出土遺物実測図 SK1, SK2, SK3
- 図版35. 出土遺物実測図 SK6, SK7, SK9, SK12, SK13, SR1
- 図版36. 出土遺物実測図 SK8, 落ち込み3, SG1
- 図版37. 出土遺物実測図 落ち込み2
- 図版38. 出土遺物実測図 落ち込み2
- 図版39. 出土遺物実測図 旧河道
- 図版40. 出土遺物実測図 遺物包含層
- 図版41. 出土遺物実測図 SH1, SH3, SH8, 落ち込み2, T1トレンチSP1
- 図版42. 調査区全景（南西より）
- 図版43. (上) T1トレンチ全景（北東より）
(下) T1トレンチ全景（南西より）
- 図版44. (上) T1トレンチ遺構群（北東より）
(下) SH1・2・3（南西より）
- 図版45. (上) SH1・2（南西より）
(下) SH1カマド部（南西より）

- 図版46. (上) S H 3 (西より)
(下) S H 3 土器出土状況 (東より)
- 図版47. (上) S H 4 (西より)
(下) S K 1 (東より)
- 図版48. (上) S H 5 (南東より)
(下) S H 5 土器出土状況 (東より)
- 図版49. (上) S H 7・8 (西より)
(下) S H 8 カマド部 (西より)
- 図版50. (上) S H 6 (北東より)
(下) S E 1 (北より)
- 図版51. (上) T 4 トレンチ全景 (北東より)
(下) T 4 トレンチ全景 (南西より)
- 図版52. (上) T 4 トレンチ遺構群 (北西より)
(下) T 4 トレンチ遺構群 (北より)
- 図版53. (上) T 4 トレンチ遺構群 (南東より)
(下) T 4 トレンチ遺構群 (北東より)
- 図版54. (上) S H 9・10 (南東より)
(下) S II 10 (南西より)
- 図版55. (上) S H 11 (北西より)
(下) S K 3・4 (南より)
- 図版56. (上) S H 13 (西より)
(下) S H 13 カマド部 (西より)
- 図版57. (上) S H 15 (北西より)
(下) S H 15 カマド部 (南西より)
- 図版58. (上) S H 14・15 (南より)
(下) S H 14 (西より)
- 図版59. (上) S H 16・17 (南西より)
(下) S H 16・17 (南東より)

- 図版60. (上) T 2 トレンチ上層遺構群 (北東より)
(下) T 2 トレンチ上層遺構群 (南より)
- 図版61. (上) S K 7 (南西より)
(下) S K 7 完掘状況 (南西より)
- 図版62. (上) S K 7 遺物出土状況 (北西より)
(下) S K 7 遺物出土状況 (北西より)
- 図版63. (上) S K 7 遺物出土状況 (北西より)
(下) S K 7 埋土堆積状況 (南西より)
- 図版64. (上) S K 6 検出状況 (西より)
(下) S K 6 遺物出土状況
- 図版65. (上) T 2 トレンチ下層遺構群 (北東より)
(下) S K 8 (西より)
- 図版66. (上) T 5 トレンチ全景 (北東より)
(下) T 5 トレンチ全景 (南西より)
- 図版67. (上) S H 18 (東より)
(下) S H 18 (西より)
- 図版68. (上) S H 19 (東より)
(下) S H 19 貯蔵穴上器出土状況 (南西より)
- 図版69. (上) S H 20 (東より)
(下) S H 21 (北西より)
- 図版70. (上) T 3 トレンチ遺構群 (北東より)
(下) T 3 トレンチ全景 (南より)
- 図版71. (上) S B 1, S G 1 (南より)
(下) S B 1 (南より)
- 図版72. (上) S G 1 (南東より)
(下) S K 10・11 (南西より)
- 図版73. (上) S B 1, P 9 断面 (北東より)
(下) S B 1, P 7 断面 (北東より)
- 図版74. (上) T 6 トレンチ全景 (北東より)
(下) T 6 トレンチ全景 (南西より)

- 図版75. (上) SK9埋土堆積状況(南西より)
(下) SK12(東より)
- 図版76. (上) SB2(北より)
(下) SB2, SK13(北西より)
- 図版77. (上) SK13(南より)
(下) SK13埋土堆積状況(南より)
- 図版78. (上) 試掘トレンチ7
(下) 試掘トレンチ8
- 図版79. (上) 試掘トレンチ9
(下) 試掘トレンチ10
- 図版80. (上) 試掘トレンチ11
(下) 試掘トレンチ12
- 図版81. (上) 試掘トレンチ13
(下) 試掘トレンチ14
- 図版82. (上) 試掘トレンチ15
(下) 試掘トレンチ17
- 図版83. 出土遺物 SH1, SH2, 落ち込み1
- 図版84. 出土遺物 落ち込み1, SH3, SH4, SH5
- 図版85. 出土遺物 SH5, SH8, SH10
- 図版86. 出土遺物 SH11, SH12, SH13, SH14
- 図版87. 出土遺物 SH14, SH19, SH20, SD3, SD4, SK1
- 図版88. 出土遺物 SK1, SK2, SK3, SK6
- 図版89. 出土遺物 SK7, SK9
- 図版90. 出土遺物 SK8, SK13, 落ち込み2, 落ち込み3
- 図版91. 出土遺物 SH1, SH3, 遺物包含層
- 図版92. 出土遺物 SH3, SH8, SH14, T1トレンチSP1, 落ち込み2
- 図版93. (上) SK5出土遺物
(下) 落ち込み2灰黒色土層出土土器

1. はじめに

当遺跡は、昭和59年度、琵琶湖大橋有料道路建設に先立って、延長約110mの範囲で発掘調査が実施された。同年度の先線試掘調査の結果、遺構が広がることが確認されたため、昭和60年度は幅24m×230mの範囲を対象として発掘調査を実施することとなった。また、60年度発掘調査区の先線延長約300mと工場代替地についても、遺構・遺物の存在の可能性を考えられるため、試掘調査を行った。

発掘調査、および整理調査にあたっては、多数の作業員・調査員・調査補助員の方々の協力を得た。また、出土鉄製品の保存処理は県埋蔵文化財センター技師中川正人が当たった。

2. 位置と環境

今回の調査対象地は、栗東町大字辻、式内高野神社の東側に位置する。北は野洲川が北西に流路をとり、南方の丘陵裾部には旧東海道が東西に通じている。遺跡の周辺は、野洲川旧河道の自然堤防状微高地に、出庭・辻・小坂などの集落が、現野洲川にはば平行して連なるように位置しており、当遺跡もその微高地ライン上にのっている。

周辺の遺跡で特に注目されるものは、当遺跡の南方、旧東海道を隔てた丘陵地に存在する古墳群である。そのなかには、三角縁三神三獸転輪鏡、盤龍鏡を出土した岡山古墳^①、龍鏡、五獸鏡、画像鏡計3面の鏡鑑のほか革織衝角対肩、鐵留肩庇付肩等の出土をみた新聞1号墳^②、全長約80cmを測る帆立貝式古墳である安養寺の椿山古墳などがある。また、遺跡の北西、出庭に存在する電塚古墳からは三角縁三神三獸仿製鏡が出土している。古墳時代の集落としては、最近の発掘調査により高野・辻周辺において、前期からの聚穴住居址が多数検出されている。^③それら聚穴住居址は、前期以降爆発的に営まれており、当地においての古墳時代大集落の存在を示している。^④また、野洲川北側の大岩山周辺の古墳群を造営した集団との関係等、考えるべき点が多い。

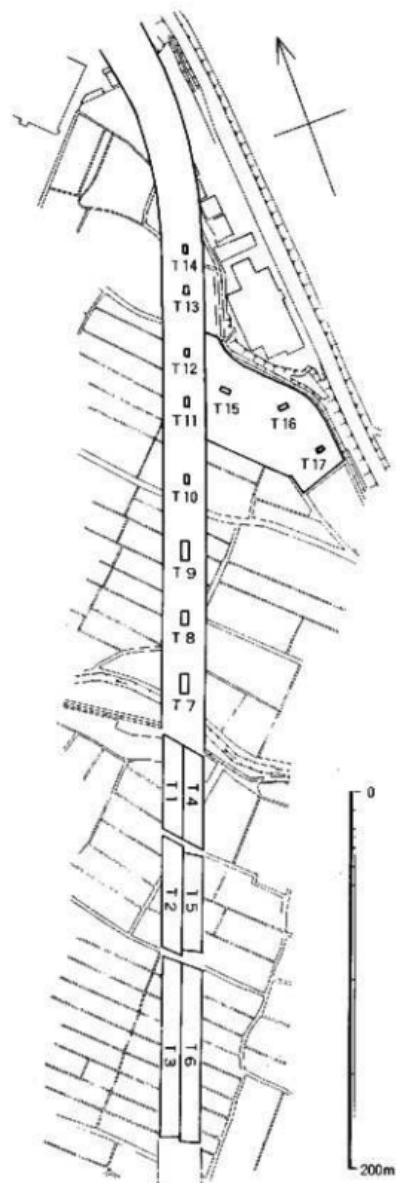
歴史時代の遺跡としては、手原周辺に周辺地割りと異なった南北地割りが認められ、瓦類や土器等が出土している。^⑤

註①当該調査区は「昭和60年度 滋賀県遺跡地図」においては、岩畠遺跡および林遺跡とされていてある。



第1図 周辺の遺跡

- | | | | |
|----------|-------------|-----------|------------|
| 1 岩畠遺跡 | 11 手原遺跡 | 21 相坂寺遺跡 | 31 佐世川遺跡 |
| 2 林遺跡 | 12 大西館遺跡 | 22 喜心寺遺跡 | 32 佐世川古墳群 |
| 3 高野遺跡 | 13 車塚古墳 | 23 多喜山A城跡 | 33 小野遺跡 |
| 4 江遺跡 | 14 多福寺遺跡 | 24 日向山古墳群 | 34 安養寺古墳群 |
| 5 大衆寺遺跡 | 15 イク塚古墳 | 25 六地蔵城跡 | 35 毛刈古墳 |
| 6 出庭古墳群 | 16 大塚古墳 | 26 堂山古墳群 | 36 山の上古墳 |
| 7 蜂屋遺跡 | 17 小瀬遺跡 | 27 岡山古墳 | 37 山寺屋敷古墳 |
| 8 ムネ寺遺跡 | 18 金山古墳群 | 28 北屋遺跡 | 38 安養寺遺跡 |
| 9 蜂屋古墳 | 19 西蓮寺遺跡 | 29 石場山遺跡 | 39 椿山池ノ浦遺跡 |
| 10 永久寺遺跡 | 20 ジョウレン寺遺跡 | 30 谷田古墳 | 40 椿山古墳 |



第2図 トレンチ配置図

- ②「近江栗太郡志」、「滋賀県史」
- ③西田弘ほか「新聞古墳」『滋賀県史蹟調査報告第12冊』 1961年
- ④「近江栗太郡志」
- ⑤近藤滋「古墳時代後期・律令期の各転換期の集落跡 栗東町高野地先 高野遺跡」
平井寿・「大型竪穴式住居を伴う古墳前期の集落跡 栗東町六地藏 高野遺跡」
大崎隆志「古墳時代を中心とする大集落跡 栗東町辻 辻遺跡」以上『滋賀文化財だより』101 1985年
- 木戸雅寿「高野遺跡発掘調査報告書」
滋賀県教育委員会、勧業文化財保護協会 1986年3月
- ⑥大橋信亦・大崎隆志「予原遺跡発掘調査報告書」栗東町教育委員会、栗東町埋蔵文化財調査団 1981年

3. 調査の経過

調査は、路線敷地外に排土を置くことができないため、調査区を東西方向に分し、先づ、T 1・2・3トレンチについて実施し、その完了後、排土を反転してT 4・5・6トレンチを設定するという方法をとることになった。

遺構検出は、表土層とその下の灰褐色土層までをバックフォーにより除去し、その後は人力により行った。但し、T 2トレンチにおいては、灰褐色土層を切り

込むピットや土壙が認められたため、一旦この面においての遺構検出・掘り込み・実測等調査を完了して後、地山面までの掘削を行うこととした。

発掘調査区先線については、20~40m間隔で試掘トレンチを8ヶ所設定した。工場代替地についても3ヶ所に試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の確認を行った。

4. 調査の結果

発掘調査区内ほぼ全域から遺構が検出された。竪穴住居址は調査区北半分に集中しておりT 1・4 トレンチは、特に遺構の分布密度が高い。T 1・4 トレンチ北端は、地山面が北側へ落ち込み、T 3・6 トレンチ南端は沼沢地状の落ち込みとなる。

(1) 発掘調査

竪穴住居址

S H 1

S H 2 を切る。竪穴コーナーは南東部のみの検出であるため平面規模は不明である。N -23° -W に主軸方向をもち、深さは35~42cmを測る。東辺にカマドが造り付けられている。床面検出のピットの深さは、P 1-35cm、P 2-10cm、P 3-39cm、P 4-23cmである。P 1 は断面観察により、径11~15cmの柱痕跡が確認され、本竪穴住居の四本主柱を構成する可能性もあるが、P 1 を覆う黄色土混じり灰色土層が緊く締まっているところから、S H 1 の建て替え、或いは P 1 が S II 2 に伴うものである可能性も考えられる。カマドは長さ約1.25m を測る長い煙道をもち、袖部がわずかではあるが遺存している。主軸はE -24° -N にもつ。カマド部出土の櫛(3)は倒位置で出土しており、支脚として使用されていた可能性がある。

遺物

カマド部より須恵器杯蓋・土師器甕類が出土している。鉄製品刀子は床面からの出土である。

須恵器杯蓋(1)は口径9.6cm、器高3.7cmを測る。天井部と口縁部を分ける回線や稜は認められない。

土師器甕(2)は口径9.2cmを測る小型のもので、最大径を体部下半にもつ。体部外面はタテハケ、内面をナナメハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。(3)は口径13.0cmを測る中型のもので、ほぼ球形の体部をもつ。体部外面上半をタテハケ、下半にはヘラケズリを加

える。体部内面はヨコハケの後、下半にナナメハケを施す。口縁部はヨコナデされ端部外面が凹む。体部下半外面に強く火を受けている。長脚甕(4)は口径21.4cm、器高約41.3cmを測り、最大径を中位にもつ長卵型の体部である。体部外面上半部を細かいナナメハケ、下半部にヘラケズリを加える。体部内面は下半を粗いナナメハケ、上半を粗いタテハケの後、肩部に細かいナナメハケを施す。口縁部は内弯し、端部は上方に面をもつ。ヨコナデにより仕上げられ、内面にはヨコハケの痕跡が残る。(5)は口径23.3cmを測り、体部中位よりやや上方に最大径をもつ。体部外面は上半をナナメハケ、下半にヘラケズリを加える。内面はタテハケおよびナナメハケを施す。口縁部は内弯し、端部は外上方に面をもつ。ヨコナデにより仕上げられ、内面にはヨコハケ痕が残る。

刀子(243)は長さ9.3cmの残存で、鏽ぶくれたため正確な数値は不明であるが、刃幅約1.1cm~1.2cm、刃厚約2mmに復元し得る。

S H 2

S H 1 に切られる。南辺は約5.3mを測り、N-45°-Eに主軸方向をもつ。深さは約40cmを測る。東辺に馬蹄形にカマド袖部が遺存しており、カマドの南側、竪穴南東コーナー部に長径96cm、短径56cm、深さ約50cmを測る貯藏穴S K 1 が存在する。S K 1 の底は平らである。床面検出ピットの深さは、P 5-46cm、P 6-10cm、P 7-10cmである。壁溝は南辺中央付近で一部遺存が認められた。幅約20cm、深さ10cmを測る。

遺物

床面より須恵器杯蓋・杯身が出土している。

杯蓋(6)は口径14.2cmを測り、天井部と口縁部を分ける稜は丸く、その下に凹線が巡る。口縁端面は内傾し、にぶい棱をもつ。杯身(7)は口径14.1cmを測り、体部の傾きが小さい。口縁端部は丸く収める。(8)・(9)は口径12.8~13.6cm、器高4.3~5.0cmを測る。口縁端面は内傾し、浅く凹み、端面と内面を分ける稜が存在する。端部先端は上方に尖る。底部内面約1/3の範囲に同心円スタンプ痕が残り、これはロクロナデにより切られている。

S H 3

落ち込み1埋土を切り込み、落ち込み2によって切られている。S H 3・落ち込み1・落ち込み2の切り合い関係を平面プランにおいて確認し得なかったため、本竪穴の東辺および南辺は断面観察による復元である。

規模は東西約4.8cm、南北約5.0m、深さ約30cmを測る。主軸方向は約N-29°-Eである。炉およびカマドは検出されなかった。床面検出の土壤およびピットの深さは、S K 1

-36cm、P 1-10cm、P 2-15cm、P 3-16cm、P 4-16cm、P 5-27cm、P 6-21cm、P 7-18cmである。

本竪穴住居が埋没する過程において、皿状の窪地となった段階で、その隙みを利用して火が焚かれたらしく、埋土中間に焼土層および炭化物を多量に含んだ土層が観察された。

遺物

床面より土師器甕・壺・高杯などの土器類の他、鉄製鎌2点、滑石製紡錘車2点が出上している。

甕(29)は縦長の楕円形の体部をもち、口縁部は外反し端部は丸く収める。口縁部および頸部は強くヨコナデされる。口径は18.4cmを測る。体部外面はタテハケおよびナナメハケが施され、内面には、粘土継接合痕および指押さえ痕が残る。体部外面に黒斑が認められる。(28)は鉢あるいは鍋の口縁部と考えられ、口径約25.2cmを測る。壺(27)は口径14.2cm、器高13.7cmで、球形の体部をもち、口縁部は短く外上方に開き、端部は尖り気味に終わる。口縁部はヨコナデ、体部外面は丁寧なナデにより仕上げられている。体部内面は指押さえの後、ナデが施されている。高杯(26)は内寄して立ち上がる杯部をもち、脚部は緩く屈曲して開く。口径13.6cm、器高10.5cmを測る。底部および、脚部外面はヘラナデが施される。脚筒部内面にシボリ痕が残る。

鉄製鎌(244)は、三日月形の小形の刃部で、刃厚約2mmである。(245)は刃幅約2.2cmを測る。

紡錘車(248)は、上径2.3~2.6cm、底径4.0cm、高さ1.6cmを測る断面台形のものである。孔は径7~8mmを測り、最初に穿ったものを中断して横にずらし穿ち直している。色調は緑灰色を呈する。(249)は、上径1.7~1.9cm、底径4.0cm、高さ1.1cm、孔径7mmを測る。孔を中心放射状に削った後、磨いて仕上げている。色調は黄緑色を呈す。

S H 4

落ち込み3・S H 13を切るが、本竪穴埋土上層灰褐色土層と落ち込み3の埋土との識別が困難であったため、竪穴住居掘り込み面においての検出はし得ず、平面プランの確認は、本竪穴住居埋土下層のレベルまで掘り下げた段階で行なった。

平面プランは、南北3.1~3.2m、東西4.1~4.2mを測る長方形を呈し、深さは約60cmを測る。床面南東コーナー部に、深さ10cmの土壠S K 1が存在する。P 1の深さは10cmを測る。

遺物

床面より、須恵器杯身(30)・土師器甕(32)・(33)が、埋土中より、土師器甕(31)が出土している。

須恵器杯身(30)は、口径13.4cm、器高4.7cmを測る。たちあがり部は内傾し、端部はやや尖り気味に丸くおさめている。生焼けで磨滅が著しい。

土師器甕(31)は口径11.0cmを測る小型のもので、口縁部は内窵し、端部内面に凹み気味の面をもつ。体部内面は斜め方向に撫で上げている。(32)は口径21.2cmを測り、内窵する口縁の端部内面は凹んだ面をもつ。長胴甕(33)は、口径23.6cmを測り、内窵気味の口縁部をもち、端部は上方に凹んだ面をもつ。体部外面はタテハケおよびナナメハケ、体部内面はナナメハケ、口縁部はヨコナナデが施される。

S H 5

竪穴東辺長約4.75m、深さ40~50cmを測る。N-9°-Eに主軸方向をもつ。床面よりP1・P2が検出され、四本主柱構造をとると考えられる。深さは、P1-25cm、P2-24cmを測り、P2において径約12cmの柱痕が確認された。竪穴南東コーナー部床面に炭化物の付着がみられた。

遺物

床面より須恵器杯身・杯蓋・高杯、土師器甕・鉢が出土している。

須恵器杯蓋(34)は口径12.2cm、器高4.5cmを測る。口縁部と体部を分ける稜が存在する。口縁部は内窵気味にのび、端部は内傾し段をもつ。杯身(35)は、口径10.6cm、器高約4.1cmを測る。たちあがりは上方へ直線的にのび、端部は内傾する面をもつ。端面と内面を分ける稜ははっきりしている。有蓋高杯(36)は口径10.0cm、器高7.3cm、底径8.0cmを測る。たちあがりは内傾し、端部内面に付い段をもつ。脚部は短く、端部は内傾する凹面をもつ。透しはない。体部下半および脚部上半にかけてカキ目調整が施される。

土師器甕(37)・(38)は外反する「く」字状口縁をもち、口径は(37)が16.0cm、(38)が19.2cmを測る。(38)は口縁部内外面に指押さえ痕が残る。鉢(39)は口径23.7cmを測り、端面は内傾し、端部外面に鋭い棱をもつ。

S H 6

カマド煙道部および、カマド本体の一部のみの検出である。煙道部は幅約20cm、長さ1.1mを測る。主軸方向はE-19°-Nにとる。煙道基部から左右に直角方向にのびる燃焼部奥壁ラインの延長上に竪穴壁面がこないことから、竪穴壁面よりもやや外側に突出する形で

カマドが構築されたものと考えられる。竪穴本体については、T 2 トレンチにおいて検出されないことから、一辺 3 m 未満の小型のものであると考えられる。

遺物

土師器長胴甕の胸部破片が出土している。

S H 7

S H 8 を切る。竪穴コーナーは、南東部のみの検出であるため、規模については不明である。竪穴東辺は 5.2m 以上を測り、N-22°-W に方位をもつ。深さは 15~20cm で、床面よりピット・土壤等は検出されなかったが、壁面のたちあがりが垂直に近いことから、竪穴住居址と判断した。

遺物

埋土中より須恵器杯身・高杯が出土地している。

杯身には、たちあがりが短く、内傾し、端部が尖る(40)と、内傾したたちあがり端部を丸くおさめる(41)・(42)がある。高杯脚部(43)はヘラで粘土を削みとることにより三方透しを表現する。内面にシボリ痕が残る。(44)の脚部は屈曲し、外方へふんばる。脚部外面にカキ目調整が施される。

S H 8

S H 7 に切られる。規模は、南北約 3.8m 、深さ約 50cm を測り、主軸方向を N-3°-W にもつ。東辺南寄りにカマドが造り付けられている。カマド燃焼部底には、径約 40cm 、深さ 7cm を測る窪みがあり、その堆上は強く焼けてしまっている。燃焼部底部を一旦掘り深めた後、火床として貼り土されている可能性がある。袖部は、一部ではあるが両側とも遺存しており、幅約 40cm を測る。煙道は幅 20~30cm 、長さ 1.18m を測り、方位を E-4°-S にもつ。先端は垂直にたちあがり、径約 15cm のピット状に地表面へ抜ける。P 1 の深さは 35cm である。

遺物

カマド部より須恵器杯蓋(46)、土師器甕(48)が、床面より須恵器杯蓋(45)、土師器甕(47)、砥石(251)が出土している。

須恵器杯蓋(45)・(46)は口徑 9.9~10.8cm 、器高 3.1~3.4cm を測る。大井部と口縁部との境の屈曲部には、継および凹線は全く認められない。口縁端部は丸く收める。(45)の大井部内面中央に仕上げナデが認められる。

土師器甕(47)は口徑 10.3cm 、器高 10.4cm を測る小型のものである。球形に近い体部をも

ち、口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味である。調整は、体部内面が横ハケ、外面は上半をナナメハケ、下半にヘラケズリを加える。口縁部は横ナデにより仕上げられる。強く火を受けている。長胴甕(48)は口径21.4cmを測る。口縁部は内弯気味で、端部に内傾する面をもち、外上方に尖り気味である。調整は、体部内外面がナナメハケ、口縁部はヨコナデである。

S H 9

S H 10を切る。南北約6.2m、東西4.3~4.6m、深さ10~18cmを測り、南北に長い長方形プランを呈する。N-25°-Wに主軸方向をもつ。床面検出の土質およびピットの深さは、SK 1-60cm、P 1-7cm、P 2-35cm、P 3-34cm、P 4-4cm、P 5-25cm、P 6-30cm、P 7-25cm、P 8-25cm、P 9-10cm、P 10-10cm、P 11-22cmである。

遺物

埋土中より、須恵器杯蓋・杯身・高杯脚部、土師器高杯脚部が出土している。須恵器杯蓋(49)は口徑13.0cmを測り、口縁部は凹み気味に内傾した面をもつ。杯身(50)は9.3cmを測る。体部は直線的で底部との境ははっきりしない。たちあがりは厚く、内傾し、低い。

S H 10

S H 9に切られる。規模は南北約4.2m、東西は豈穴北辺が約4.5m、南辺が約3.0mを測り、北側へ広がり気味の南北に長い長方形プランを呈する。深さは38~40cmで、主軸方向はN-24°-Eである。豈穴北西コーナー部に長径110cm、短径90cm、深さ30cmを測るSK 1が存在する。貯蔵穴として使用されたものであろう。豈穴南東コーナー付近には、作業台石とみられる偏平な自然石が据えられている。床面検出ピットの深さは、P 12-7cm、P 13-10cm、P 14-13cm、P 15-23cm、P 16-17cm、P 17-10cm、P 18-19cm、P 19-7cmである。

遺物

遺物は床面より、土師器甕(64)、鉢(55)、高杯(58~62)が、SK 1より、土師器甕(53・54)、鉢(63)が出土している。

受口状口縁甕(53)は口徑14.6cmを測り、端部は外上方につまみ出される。(54)は口徑15.0cmを測り、端部は横方向につまみ出され、外傾する凹んだ面をもつ。鉢(55)は口径16.0cm、器高11.1cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり、端部は外傾する面をもつ。調整は、体部外面が縦方向のナデ、内面は指押さえの後にナデが加えられ、底部は未調整である。

口縁部はヨコナデである。体部外面に黒斑が認められる。高杯杯部は口径14.4~15.4cmを測り、内弯気味に立ち上がるるもの(58~60)と、直線的に立ち上がり、口縁部と底部との境が屈曲し、外面にぶい縫をもつもの(61)がある。鉢(63)は口径13.3cm、器高5.1cmを測り、口縁部はわずかに外反し、端部は上方に尖る。甕(64)は口径17.6cmを測り、「く」字状の口縁部は外反気味に開き、端部は、外傾する面をもつ。

S H11

S H12を切る。南北4.0~4.3cm、東西3.2~3.3m、深さ15cmを測り、南北に長い長方形プランを呈する。主軸方向はN-30°Wである。床面検出ピットの深さは、P11-16cm、P12-19cmである。

遺物

土師器甕(65)は床面からの、(66)は埋土中よりの出土である。(65)は口径13.6cm、器高13.0cmを測る。球形の体部で、強く外反して開く口縁部をもち、口縁端部は尖り気味に終わる。全体に火を受けている。(66)は内弯気味の口縁部で、内面の調整は、ヨコハケの後、ヨコナデする。

S H12

S H11・S K 2・近世の長方形土壙に切られる。規模は、東西・南北ともに約6.4mを測る。深さは36cm前後である。主軸方向はN-39°-Wにもつ。S K 2埋土を掘りきった段階で土壙底が焼土化しているのが確認できた。本駆穴に伴なう炉がS K 2の下付近に存在した可能性がある。床面検出ピットの深さは、P 1-30cm、P 2-13cm、P 3-10cm、P 4-8cm、P 5-21cm、P 6-19cm、P 7-24cm、P 8-35cm、P 9-26cm、P 10-10cmである。

遺物

埋土中より、土師器甕・壺・鉢・高杯・鍋・杯などが出土している。

受口式口縁甕(67・68)は口径13.8~14.2cmを測り、端部は外側やや上方につまみ出され、尖り気味に終わる。甕(69)は口径14.0cmを測り、口縁は直線的に外上方へ開き、端部は上方に面をもつ。鉢(70)は口径14.4cmを測り、張りの小さい体部に、外反気味に開く口縁部をもつ。調整は、口縁部がヨコナデ、体部内外面ともナデである。体部外面に黒斑が認められる。二重口縁壺(71)は口径22.6cmを測り、口縁部は一段目、二段目とも外反する。高杯(72)は口径14.4cmを測り、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部と底部の境界外面にぶい縫をもつ。(73)は、ひずんでおり、口径についてはやや疑問が残る。杯部は内弯し、

外反する口縁部をもつ。杯(75)は口径11.0cm、器高2.9cmを測る。端部は内傾する面をもち、尖り気味に終わる。鍋(76)は口径26.0cmを測る。把手が剥離している。口縁部は内弯気味に開き、端部は外上方へつまみ出され、上方に凹んだ面をもつ。体部外面に黒斑が認められる。

S H13

落ち込み3を切るが、豎穴西側半分については、T 1トレンチ調査時において検出し得なかった。また豎穴北東部において土壠との切り合いがみられた。本豎穴住居は、SK 2を切り、SK 3によって切られている。規模は、東辺が約5.4mを測り、深さは、22~38cmである。主軸方向はN-14°-Wにもつ。東辺南寄りにカマドが造り付けられている。袖部は北側が長さ56cm、南側が107cm遺存しており、燃焼部幅約70cmを測る。燃焼部のほぼ中央に、長さ17cmの河原石が立てられ、支脚として使用されている。煙道は基部幅40cm、検出時での長さ50cmを測る。カマド部の南側、豎穴南東コーナー部に、貯蔵穴として使用されたものと思われるSK 1が存在する。規模は、長径122cm、短径100cm、深さ約30cmを測る。底は橢鉢形に凹んでいる。

遺物

カマド部より土師器甕(79)が、埋土中から須恵器杯身(77)・甕(78)が出土している。須恵器杯身は口径13.6cm、器高約4.8cmを測る。端部は丸く、やや尖り気味である。甕(78)は口径17.4cmを測り、口頸部は外反して開く。土師器甕(79)は口径20.0cmを測る。やや張りのある体部で、口縁部は「く」字状に直線的に開く。

S H14

S H15に切られる。規模は、東西・南北とも約4.8m、深さは約20cmを測る。主軸方向はN-2°30'-Eである。豎穴南辺中央部や東寄りに、貯蔵穴として使用されたと思われる土壠SK 1が存在する。これは、南北約70cm、東西約90cm、深さ約75cmを測り、底は平らである。SK 1の東側、豎穴南東コーナー部から偏平な作業台石が出土している。石の両面ともに磨滅している。床面検出の土壠およびピットの深さは、SK 2-約10cm、P 1-11cm、P 2-5cm、P 3-7cm、P 4-16cmである。

遺物

埋土中より、須恵器杯蓋・杯身、土師器甕、鐵冶滓(写真252)などが出土している。須恵器杯蓋(80)は口径13.9cm、器高4.1cmを測る。大井部と口縁部を分ける棱および凹線ははっきりしない。口縁部内面は、内傾する凹んだ面をもち、端面と内面を分ける棱線

は明瞭である。犬井部内面約 $\frac{1}{2}$ の範囲に同心円スタンプ痕が残る。これはナデにより切られる。(81)は口径13.6cm、器高5.1cmを測る。天井部と口縁部は、にぶい棱および凹線により分かれる。口縁部内面は、内傾する凹んだ面をもち、端面と内面とを分ける棱線は明瞭である。犬井部内面約 $\frac{1}{2}$ の範囲に指押さえ痕が残る。杯身(82・83)は口径10.6~12.2cm、器高4.3~5.3cmを測る。たちあがりは内傾気味で、端部は丸く收める。底部外面は未調整である。(82)の底部内面には、同心円スタンプの痕跡らしきものが認められる。土師器壺(84)は球形の体部をもち最大径は12.8cmを測る。調整は、外面がナナメハケ、内面は斜め方向に撫で上げている。体部上半 $\frac{1}{2}$ 以上に強く火を受けている。口縁部(85)は口径26.0cmを測る。口縁部と体部の境の肩曲は緩やかで、端部は丸くにぶい。体部内面はヘラケズリ調整である。

S H15

S H14を切る。不整形の竪穴住居である。竪穴住居の重複の可能性を考え、断面を精査し掘り込みを行った結果、竪穴住居の重複による不整形プランではなく、一棟の竪穴住居としてまとまることが判明した。壁面についても、肩くずれをおこした状況は観察されず、割合い、しっかりと立ち上がっている。深さは、20~32cmを測る。北東コーナー部には、煙道がとりつき、火を受けている。煙道は、長さ約1.0mを測り、方位をE-31°-Nにもつ。P 1は深さ13cm、P 2は7cmである。

遺物

埋土中より須恵器杯身(86・87)が出土している。(86)は口径10.7cmを測り、たちあがりは厚く、内傾する。(87)は口径9.4cmを測り、短いたちあがりは肩曲し、尖り氣味に終わる。

S H16

S H17を切り、浅い落ち込み状土壌により切られる。規模は、南北約3.0m、東西2.1~2.8m、深さ40~50cmを測り、やや南北に長い平面プランを呈す。深さは40~50cmを測り、主軸方向はN-37°-Wである。床面は中央部が円形の高まり状を呈し、堅く踏み締められている。煙道は竪穴東辺にとり付き、幅25~50cm、長さ約1.0mを測る。煙道の北側には、作業台石とみられる楕円形の石が置かれている。床面からはビット等の検出は無かった。本竪穴は、他のものに比べて格段に面積が小さく、竪穴的な使用のされ方がされていく可能性がある。

S H17

S H16および落ち込み状土壤により切られる。規模は、南北約5.0m、東西約4.8m、深さ約30cmを測る。主軸方向はN-20°-Eである。豊穴北東コーナー部は肩くずれをおこし、大きく外側へ広がっている。豊穴の北・西辺および南東コーナー部の床面には壁溝の一部が遺存している。壁溝は、幅10~30cm、深さ約5cmを測る。床面検出ピットの深さは、P 1-21cm、P 2-10cm、P 3-15cm、P 4-32cm、P 5-29cm、P 6-5cm、P 7-5cm、P 8-12cmである。

遺物

土師器高杯(91)は床面からの出土、他のものは埋土中よりの出土である。

甕口縁(89)は口径16.6cmを測る。端部は内面に肥厚し、にぶい棱を作る。受口状口縁壺(88)は口径14.8cmを測り、口縁端部は外上方へつまみ出される。口縁部(92)は口径26.8cmを測り、端部は外側に平坦面をもつ。高杯杯部(90)は口径16.0cmを測り、口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。(91)は口径21.2cmを測り、口縁部と底部との境の斜曲部外面に棱をもつ。口縁部はやや外反気味で、端部は外上方に面をもつ。

S H18

規模は、豊穴西辺の長さで約3.9m、東辺は4.1m以上、深さ約30cmを測る。主軸方向は約N-3°30'-Wである。豊穴東辺寄りに位置するSK Iには焼土・灰が充満しており、カマド部である可能性がある。床面検出の土壤およびピットの深さは、SK I-20cm、SK 2-14cm、P 1-35cm、P 2-15cm、P 4-34cm、P 5-16cm、P 6-28cm、P 7-21cmである。

遺物

埋土中より須恵器杯蓋・杯身等が出土している。

杯蓋(94)は口径17.1cmを測る。かえりは僅かに口縁部よりも下方へ突出する。口縁端部は丸く終わる。(95・96)は、かえりが口縁部以下に突出しない。杯身(97)は口径9.7cmを測り、たちあがりは内傾する。

S H19

溝S D 5を切る。規模は、東西約4.3~4.4m、南北約4.3m、深さ8~12cmを測る。主軸方向はN-13°-Wである。豊穴北東コーナー部に貯藏穴SK Iが存在する。これは、長径約90cm、短径約70cmを測り、底は丸い。SK Iより、土師器壺(101)が据えられたままの状態で出土している。豊穴北辺中央やや東寄り、貯藏穴SK Iの西側の床面が火を受

け焼土化している。造り付けカマドの残骸であろう。床面から、ピットは検出されなかつた。

遺物

床面上から須恵器杯蓋(98~100)が、貯蔵穴SK1より土師器甕(101)が出土している。須恵器杯蓋(98)は口径13.0cm、器高3.65cmを測る。天井部は一段高くふくらみ、ヘラケズリが加えられる。かえりの先端は口縁部以下に突出しない。(99)は口径16.4cm、器高2.05cmを測る。天井部から口縁端部にかけては概ね平らで、天井部外面はナデ調整である。かえりは低くにぶい。(100)の内面中央には仕上げナデが施される。

土師器甕(101)は口径15.6cm、器高18.1cmを測る。球形の体部に内寄する口縁部が付き、口縁端部は丸く收める。調整は、口縁部が内面ヨコハケの後ヨコナデ、体部外面は上半がナナメハケ、下半は斜方向のヘラケズリが加えられ、底部のみ横方向へ回転するヘラケズリである。体部内面はナナメハケ調整が施される。

SH20

規模は、東西約4.1m、南北3.85~3.9mを測る。深さは0~10cmで、豊穴南西コーナーは削平され消失している。主軸方向は約N-20°-Wである。床面から、ピット・土壠等は検出されなかつた。

遺物

床面上より須恵器杯蓋(102・103)、土師器長胴甕(104・105)が出土している。

須恵器杯蓋(102)は口径16.0cm、器高2.8cmを測る。天井部は平らで、中央に偏平なつまみが付く。蓋内面のかえりは口縁部以下に突出しない。口縁端部は丸く收める。調整は内外面ともヨコナデが施され、内面中央に仕上げナデが認められる。(103)は口径15~18cmを測る。内面のかえりは低くにぶいもので、口縁端部は下方向へやや尖り気味である。

土師器長胴甕(104)は口径23.0cmを測る。口縁部は内寄して開き、端部は、やや内傾気味の面をもつ。口縁部は内面をヨコハケした後、ヨコナデが施される。体部は内外面ともナナメハケ調整による。(105)は口径22.0cmを測る。口縁部は内寄気味に開き、端部は丸く收める。磨滅が著しいが、体部外面にタテハケが認められる。

SH21

深さ約20cmを測る土壠である。トレンチ外に続くため、平面プランおよび規模等については不明である。底が偏平であることから豊穴住居址のコーナー部が検出されたものである可能性がある。本土壠を豊穴住居址とみた場合、その主軸方向はN-15°-W~N-30°

-Wに推定できる。

遺物

埋土中より須恵器杯底部(106)が出土している。高台は径10.5cmを測り、外方へ踏ん張る。脚縁面はほぼ水平である。

掘立柱建物

S B 1

T 3・6トレンチ南端の沼沢地状落ち込みの堆土を切り込む。桁行3間、梁行2間を数える南北棟建物である。柱掘り方は一辺60~90cmを測る方形のもので、ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦である。深さは50~70cmを測る。柱根の遺存は無く、柱根痕跡について、平面での位置およびプランを確認し得たのはP10においてのみである。柱根は径15~27cmの円形のものである。また、P7・P9については断面観察により柱痕が確認された。P7・P10柱根心心距離が644cmを測り、また、P9・P10柱根心心距離が210cmを測ることから、柱間7尺等間の建物であることがわかる。建物の主軸方向は、P7・P9・P10柱根痕跡より復元すると、建物東側柱筋でN-22°30'-Wにもつことになる。

遺物

P5柱掘り方埋土最下層より、上師器III(107)が出土している。これは、口径18.2cm、器高約2.5cmを測り、胎土は精良である。口縁部は外反弯曲し、端部は粘土が折り返され、外上方に面をもつ。内面および口縁部外面はヨコナデ調整、底部外面はヘラケズリが加えられる。暗文は認められない。

S B 2

S K13を切る。身舎が桁行3間(約5.6m)、梁行2間(約4.6m)を数える南北棟建物である。柱掘り方は、径45~85cmの円形、または梢円形のもので、深さは20cm前後のものが多く、一番深いもので76cmを測る。掘り方底は平坦なものが多い。棟持柱P6およびP9は、それぞれ建物北側・南側柱筋から外側にせり出した位置にある。この2柱穴は他のものに比べて深く掘り込まれている。P6とP9の心心距離は約6.3mを測る。P6の左右にP7・P8が、P9の左右にP10・P11がそれぞれ位置する。柱根痕跡はP13およびP14において平面位置・プランが、P2については断面観察によりこれが確認された。柱は径17~25cmを測る円形のものである。P13・P14の柱根心心距離は1.9mを測る。建物の主軸方向はN-25°-Wである。

東・西側柱列の心心距離で1.4~1.6m外側に、幅50~70cm、深さ10~20cmを測る溝S D

1・2が存在する。溝底にはピット状の窪みがみられるが、これは施柱になるようなものではない。SD1・SD2の性格についても、施柱設置のための布掘り掘り方ではなく、雨落ち溝的なものであろう。ただ、建物北側に位置するSD3については、深さが約3.5cmでやや深く、P9とP6を通したライン延長上に柱を建てたための掘り方であるかもしれない。この場合P1と対応し、身舎北側に付属施設が取り付く建物構造をとる可能性がある。

遺物

SD1埋土中より土師器の細片が出土しているが器形・時間等不明である。また、直接SB2に伴うものではないがP15から須恵器杯蓋摘み部(108)が出土している。

方形周溝墓

SG1

台状部は、東西9.8m以上、南北8.8m以上を測り、幅1.6~2.5m、深さ約70cmの周溝がめぐる。方位は約N-28°-Wである。周溝の屈曲は直角に近く、内側・外側ともほぼ同傾斜をもって掘られている。底は平坦で、幅は60~90cmである。

遺物

周溝埋土中より、土師器細片の出土をみたが、図化し得たものは甕(183)のみである。受口状口縁甕の口縁部で、口径12.4cmを測る。端部は横につまみ出される。

土 墓

SK1

長径142cm、短径103cm、深さ35cmを測る楕円形の土壙で、底は舟底状を呈する。

遺物

須恵器杯身・杯蓋、土師器鍋が出土している。

須恵器杯蓋(131~133)は、口径13.0~14.6cmを測り、器高は(131)が4.8cmである。(131・132)の天井部が丸みをもつて対し、(133)は偏平である。口縁部と天井部の境界は稜をなし、口縁部がほぼ垂直に立つもの(132・133)と、開き気味のもの(131)とがある。(131・133)の口縁端部はやや凹み気味の内傾する面をもち、(132)は内面に段をもつ。杯身(134・135)は、口径12.2cm~12.8cm、器高5.4~5.6cmを測る。丸みを帯びた底部で、たちあがりの端部は丸く取れる。(134)の底部外面中央には、長さ7.5cmを測る一文字のハラ記号が施される。

土師器鍋(136)は、口径20.0cmを測る。口縁部はヨコナデにより内面ににおい稜をもつ。

口縁端部は四角く、端面は外傾気味で平坦である。体部外面にハケ目の痕跡が認められ、内面には指頭圧痕が残る。底部外面付近に黒斑がみられる。

S K 2

S H 15を切る。長径約2.0m、短径約0.5m、深さ約45cmを測る土壌である。本土壌の底面は焼土化しているが、これは本土壌に直接関係するものではなく、S H 15床面の炉を切る形で土壌が掘り込まれているための現象である。

遺物

須恵器杯身・杯蓋・豆・綠釉陶器などが出土している。

須恵器杯身(138・139)は、口径11.2~11.4cm、器高3.6cmを測る。体部・底部は浅く偏平で、たちあがりは低く内傾する。豆(137)は、胴部最大径9.2cmを測り、肩部と円孔下が凹線状に凹む。底部に回転ヘラケズリを加える。杯蓋(140)は、口径16.7cm、器高3.6cmを測る。天井部は緩やかにふくらみ、中央に偏平な宝珠形つまみが付く。内面のかえりは短く、口縁端部は丸く収める。調整はロクロナデによる。(141)は綠釉陶器碗底部である。貼り付け高台で、底径は7.9cmを測る。底部内面に2本の沈線が廻り、高台に弱い段をもつ。胎土は良好で明赤褐色を呈する。内外面に施された釉は、濁った黄緑色を呈す。

S K 3・4

S K 3は、短径が70cm、長径は推定で105cm前後を測り、深さは約25cmである。S K 4は、長径約100cm、短径約80cm、深さ約50cmを測る。S K 3とS K 4の切り合い関係については明らかにし得なかった。両土壌上は、厚さ20~25cmの灰褐色土層で覆われ、それを切り込んでS H 11が営まれている。

遺物

須恵器杯身3点の出土をみた。このうち(142・143)は完形で、土壌底からほぼ正位置で出土している。口径10.8~12.5cm、器高は3.9~4.5cmを測る。たちあがりは内傾気味で端部は丸く終わる。底部は(142)がヘラケズリされ、(143・144)は未調整である。(142)の底部内面に仕上げナデが認められる。

S K 5

S E 1に切られる。長さ約6.3m、幅1.4~2.3m、深さ約20cmを測る。埋土は灰色泥土である。

遺物

埋土中からは、天日茶碗底部、染め付け片などの土器類の他、石製硯、鉄製品、砥石、

炉壁、鉄滓等が出土している。

S K 6

南北0.5~0.7m、東西1.3m以上、深さ12cmを測る東西に長い土壙である。埋土は灰色粘質土である。土壙長軸は、約E-19°-Nに方位をもつ。

遺物

黒色土器碗・土師小皿が重なり合った状態で出土している。

土師小皿(145~147)は、口径9.9~10.5cm、器高1.7~2.0cmを測る。口縁部はヨコナデされ外反する。胎土は良好で、色調は橙味を帯びた灰白色を呈する。黒色土器碗(148)は、口径14.3cm、高台径5.5cm、器高6.1cmを測る。体部は厚手で緩やかに内弯し、外方へ踏張る厚手の高台が付き、口縁内側に沈線が廻る。内面は口縁部に向けて右上がりのヘラミガキを施す。底部内面は、部分的に、粗い平行ミガキが認められる。口縁部外面は横方向にヘラミガキされる。

S K 7

長さ2.83m、幅0.8~0.95m、深さ40cmを測る平面長方形の土壙で、小溝に切られている。土壙長軸方向はおよそE-37°-Sである。ほぼ垂直に掘り込まれ、壁面と底面の境も直角に近い。埋土は、最下層の灰色粘土(Ⅲ層)と、その上に堆積する粘質土とに分かれる。Ⅱ層は鉄分の浸透により土色が変化しているもので、土質としてはⅠ層と同じである。遺物は土壙北側半分に集中しており、土器類のほかに、人頭大の礫2個が土壙底から出土している。このうち北側のものは火を受け焼けている。土器類は、土師小皿2点が土壙底に接地した状態での出土で、他のものは、土壙底から浮いた状態での出土である。黒色土器碗の中に、意識的に小礫を入れたような状況が認められた。

遺物

黒色土器碗2点、土師大皿1点、土師小皿8点の出土をみた。

黒色土器碗(149・150)は、口径14.3~15.1cm、高台径5.7~6.5cm、器高5.3~5.7cmを測る。体部は緩やかに内弯し、口縁部内側には沈線が廻る。高台は(149)が、厚く、外側へ踏ん張り、(150)は下方へ、やや尖り気味である。内面は右上がりと左上がりの放射状ミガキを交差させ施している。外面は高台外縁を基端に口縁部に向かって右上がりのヘラミガキが施される。(149)の口縁外面に横方向のヘラ磨きが認められる。土師大皿(151)は、口径14.5cm、器高3.3cmを測る。磨減が著しいために細かい調整等は不明であるが、口縁部は二段撫でによると思われ、端部は丸く收めている。土師小皿(152)は、口径9.0cm、器高1.4

cmを測る。口縁部は「て」字状の屈曲部をもつが、端部は外上方に引き出され、尖り気味に終わる。胎土は精良で乳白色を呈す。(153・154)は、口径8.6~9.0cm、器高1.7~1.8cmを測る。口縁部の調整は二段撫でによっている。胎土は径1mmまでの砂粒を含み、橙白色を呈す。(155~157)は、口径8.4~8.8cm、器高1.9~2.2cmを測る。体部は全体が内弯気味でやや深い。胎土は良好で、色調はやや褐色味を帯びた灰白色を呈す。(158・159)は口径8.2~8.3cm、器高1.4~1.5cmを測る。全体に薄手で浅い。胎土は径1mm大の砂粒を含み、灰白色を呈す。

S K 8

東西約2.6m、南北約0.9mを測る細長い平面形を呈す。深さは5~8cmを測り、底にピット状の窪みを伴う。

遺物

土師質移動式カマド(172)、須恵器杯蓋(174)が出土している。カマドは、やや上反り気味の底が付けられる。底の付け根部分は、接着後ヨコナデされる。焚口縁部外面にハケ目痕跡が残る。把手(173)も胎土・焼成から、カマドの部分であると考えられる。(174)は、口径12.6cmを測り、天井部と口縁部との境の稜や凹線は全く認められない。

S K 9

流路S R Iを切る。口径1.5~1.8m、深さ80cmを測る。底は丸い。

遺物

綠釉陶器(161)は、高台径6.6cmを測り、灰白色の軟陶の素地に、黄味を帯びた淡緑色の釉が施される。底部内面に沈線が廻り、高台内側に段をもつ。底部外面には回転糸切り痕が認められる。灰釉陶器(162)は、高台径6.8cmを測る。高台は低く、九みを帯びる。体部外面にはヘラケズリが認められ、底部外面には回転糸切り痕が残る。底部内面には釉がかかっていない。土師皿(163)は、口径10.2cm、器高2.0cmを測る。「て」字状口縁をもち、端部は肥厚し、段をもつ。

S K 10

平面プランは東西に長い楕円形を呈し、長軸方向をおよそE~25°~Nにもつ。規模は、東西2.4m、南北1.2mを測り、深さは約60cmである。ほぼ垂直に掘り込まれ、壁面と底の境も直角に近い。底は平らである。埋土は、下層が砂質土、上層が粘質土で、土質・土色ともS G 1およびS K 11に似ている。遺物の出土はみられなかった。

S K 11

平面形はS K 10と同様、東西に長い楕円形であるが、北辺は直線に近い。長軸方向はおよそE-18°-Nである。規模は、東西約3.05m、南北約1.4mを測り、深さは66cmである。壁面はほぼ垂直で、底は平らである。埋土の堆積は、基本的にS G 1・S K 10と似ている。遺物の出土は無い。

S K 12

長径7.6m、短径4.4m、深さは最深部で45cmを測る。底は楕円形に段をもって落ち込む。

遺物

土師器甕(164)は、D径15.6cmを測る。直線的に聞く口縁で、端部は内傾気味の面をもつ。ヨコナデ調整である。

S K 13

S B 2に切られる。東西5.4m、南北4.8~5.2mを測り、平面形は円形に近い隅丸方形状を呈す。深さは約65cmを測る。30°~40°の勾配で掘り込まれており、底は平坦である。埋土は自然堆積の状況を示している。

遺物

受口状口縁甕(165)は、口径15.2cmを測り、口縁端部は外上方へつまみ出される。高杯(166)は、口径15.6cm、脚幅部径11.6cmを測る。杯部は深く、やや内窪気味で、底部との境はゆるやかに屈曲する。脚部は屈曲して外方へ開く。筒部外面にはヘラナデが施される。

井 戸

S E 1

S K 5を切る。径2.4~2.6mを測る円形の井戸である。掘鉢形に掘り込まれており、深さは1.6mを測る。底には50cm間隔で角杭が打ち込まれており、それに横材が渡されていた。

遺物

染め付けの破片等の出土をみた。

溝

S D 1

T 1・T 4トレンチの北端、旧河道状落ち込みの肩部付近を東西に延びる。幅0.8~1.3m、深さは約30cmを測り、方向はN-30°-E~N-45°-Eにもつ。埋土は灰色粘質土で、少量の土器細片の出土をみた。

S D 2

落ち込み 1 を切り、落ち込み 2 によって切られる。幅0.8~1.1m、深さ約50cmを測り、屈曲して延びる。

S D 3

幅約70cm、深さ約20cmを測り、弧を描いて延びる。

遺物

須恵器・土師器が出土している。土師器高杯脚部(127)には、直角方向に3方から円孔が穿たれる。

S D 4

南北に直線的に延びる。幅約50cm、深さ約15cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。S D 5との切り合い関係については明らかにし得なかった。

S D 5

幅約50cm、深さ約15cmを測る。埋土は灰褐色粘質土で、須恵器甕(129)・杯身(130)の出土をみた。甕は口径23.1cm、器高は推定で44.5cmを測る。口縁端部は外側に肥厚し、にぶい稜をもつ。内面調整の同心円スタンプは、肩部内面が径2cmの3重のもの、以下は径4cmの6重のものである。頸部外面はカキ口調整の後、ヨコナデが施される。(130)は径10.8cmを測る。

落ち込み 1

落ち込み 2・S H 3・S D 2 を切る。深さは約15cmである。

遺物

須恵器・土師器が出土している。(22)は手づくね土器で、口径3.8cm、器高4.1cmを測る。口縁端部は上方へつまれ、やや尖り気味である。(23)は粘土紐巻き上げの後、指押さえによる成形である。体部は偏平な底部からほぼ垂直に立ち上がり、口径6~7cm、器高8.7cmを測る。口縁部から数えて3段目・4段目の粘土紐のみ、他の部分と違った胎土である。

落ち込み 2

S H 3・S D 2・落ち込み 1 に切られる。深さは約50cmを測る。

遺物

最下層灰黒色土層中より、布留式土器・鉄鎌が出土し、また、灰黄色土層から須恵器二重聯(215)の出土をみた。

受口状口縁甕(184~193)は口径11.0~15.0cmを測る。口縁端部は外方へつまみ出され、

上方に平坦な面をもつもの(185・187・188・190・193)と、丸く收めるもの(184・186・189・191・192)がある。甕(194・196・197)の口縁端部は内側に肥厚する。(195)の口縁端部内面はヨコナデされることにより凹む。底部(198・199)は平底のものである。壺(200)は外反して開く口頸部で口径15.0cmを測る。(202)は口径20.4cmを測り、口縁端部は上方へ尖り気味で、外面に凹んだ面をもつ。(201)は口径15.8cmを測り、口縁端部は内側に肥厚する。(203)は直線的に開く口頸部で、口径は20.4cmである。二重口縁甕(204)は口径26.8cmを測る。口縁部は一段目、二段目とも外反気味で、端部は外上方に面をもつ。(205)は口径14.0cmを測る。小型丸底壺(206)は体部最大径6.6cmを測る。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデ調整である。体部内面に赤色顔料の付着が認められる。高杯杯部(207)は口径15.0cmを測り、杯底部と口縁部の境は緩やかに屈曲する。底部外面に粗いヘラミガキが施される。(209)は口径13.6cmを測り、底部と口縁部の境の屈曲はみられない。内外面に粗い横方向のヘラミガキが施される。高杯脚部には筒部と裾部の境の屈曲が明瞭なもの(210・211)と、はっきりした屈曲をもたず、緩やかに開くもの(208・212)がある。(210)は筒部外面をヘラナデした後、筒部と裾部外面に粗い横方向のヘラミガキを施す。(209)と同一個体である可能性がある。(212)の裾部内面にはヘラ記号が認められる。

(215)は須恵器二重甕である。体部は内側のみの残存で、口径9.3cmを測る。平底で体部下半外面にはカキ目痕が残り、下辺を横方向にヘラケズリする。体部外面中位や上方には、外側の体部に透し孔を穿つ時にいたと思われるヘラ先の当たりが観察される。口頸部外面には2条の鋭い棱をもち、その下に波状文が施される。胎土・焼成とも良好で、色調は、口頸部外面および体部外面が明青灰色・肩部外面および口頸部内面は赤灰色(セピア)を呈する。

鉄鎌(247)は鎌幅約3.6cmで逆刺しをもつ。(246)は長さ約13.4cmを測る大型のもので、茎は一辺4mmを測る断面方形のものである。

落ち込み3

SII4・SH13により切られる。深さは約60cmを測る。

旧河道

T1・T4トレンチは、北端において緩やかに落ち込み、最深部、トレンチ北壁部において造構面との比高約1mを測る。これは発掘調査区の北側を流れる今井川の舊ての河道であると考えられる。黒色土器(222)は埋土最下層からの出土である。高台は外側へ踏ん張り気味で、径5.6cmを測る。

流 路

S R I

T 3・T 6 トレンチを南東から北西方向へ向かって流れる。幅7~8m、深さ約35cmを測り、底は起伏をもつ。粗砂および中砂により埋没している。SK 9に切られる。遺物は土器類のほかに平瓦片(171)が出土している。厚さは1.7~1.8cmを測る。凹面は布目を指で擦り消すが、綫でを消し切ってはいない。凸面には格子叩き目が残る。須恵質で、色調は灰白色を呈す。

その他の出土遺物

(230~242)は遺物包含層、(250)はT 1 トレンチ S P 1 よりの出土である。
(230)は須恵器杯底部で、高台径9.7cmを測る。底部外面に「天福來」と墨書きされている。
(231)は須恵器擂鉢である。須恵器短頸壺(235)は、口径4.1cm、器高3.8cmを測る小型のものである。口縁端部は上方に凹み気味の面をもち、底部外面はヘラケズリされる。(236)は土師器杯である。須恵器の杯身を模したものと思われる。(237)は縁釉陶器瓶である。貼り付け高台で径は7.4cmを測る。胎土は精良で、黄灰色を呈す軟陶の素地である。縁釉はほとんどが剥落しているが、体部外面に部分的に濃緑色の釉が認められる。(238・239)は縁釉陶器である。(238)の底部はほぼ水平で、高台径は8.5cmを測る。底部内面には厚く釉が付着するが、自然釉である可能性もある。底部外面には回転糸切り痕が残存している。瓶(239)は高台径8.4cm、体部最大径14.2cmを測る。外面はヘラケズリされ、釉は刷毛塗りされる。胎土には黒色粒を多く含む。(240)は韓式系土器である。土師質で褐灰色を呈す。厚さ7~9mmを測り、外面には格子叩きが施される。(241)は大型の上師器高杯の脚筒部である。(242)は土師器鍋で、口縁端部は外上方に面をもつ。玉(250)は長さ1.6cm、幅1.0cm、厚さ0.8cm、孔径約0.2cmを測る。断面は偏珠形であるが、二面は平坦に仕上げられている。孔は両側から穿たれる。丁寧に磨き上げられており、色調は黄色および緑色を呈する。材質は硬玉であると思われる。

(2)試掘調査

今井川よりも北側の試掘調査対象地は野洲川の山河道地であり、発掘調査対象地よりも現在の水出面で約1m低くなっている。

調査の結果、当該地区には遺構が存在しないことが判明した。また、遺物はT 8 トレンチⅠ層・T 9 トレンチⅡ層・T 11 トレンチⅢ層・T 14 トレンチⅣ層・T 15 トレンチⅤ層よ

りわずかに土器の出土をみたが、何れも細片で、著しく磨滅したものであったため、野洲川の氾濫により当地にもたらされたものと判断された。

5.まとめ

調査の結果、多数の遺構および遺物の発見をみたが、最後にそれら遺構を時期的に分類し、本調査区における集落の変遷をみるとこととする。

I期 布留期

S H10・12・17、S K10・11・12・13、S G 1がある。発掘調査区の北側と南側に分かれて遺構が存在する。時期は布留期にあっても、後半に比定されよう。T 3・6 トレンチの南西側で実施された栗東町の調査においても、方形周溝墓群が確認されており、T 3 トレンチ S G 1もその広がりの中でとえられるものである。北側遺構群と南側遺構群が、それぞれ対応した住居域、墓域である可能性がある。

II期 5世紀末葉～6世紀初頭

S H3・5がある。竪穴住居には未だ造り付けカマドの存在は認められない。

III期 6世紀前葉～中葉

S H2・13・14、S D3、S K1・3・4がある。竪穴住居にカマドが造り付けられるようになる。また、各住居址とも貯蔵穴をもっており、S H12・S H13はカマドの右側にそれが位置している。S H13出土の上部器窓(79)には長胴化が認められるが、まだ定形化したものはみられない。

IV期 6世紀後葉

S H4がある。胸部まで残っているものは無いが、S H4出土土器窓の口縁部は内弯したものである。

V期 6世紀末葉～7世紀前半

S H1・6・7・8・9・11・15・16、S D2、S K8がある。この時期の竪穴住居には、S H16のようにすば抜けて小型のものが存在する。また、長さ1m以上の煙道を作りカマドが特徴的である。煙道の主軸方位は、E-4°-S-E-35°-Nの範囲である。長胴窓は、体部最大径が口徑を大きく上まわることがない。口縁部は内弯し、体部下半にはヘラケズリが加えられる、所謂、定形化した近江型長胴窓である。当期以降、長胴窓が普遍的な存在となっており、破片を含めると、ほぼ総ての竪穴住居から出土をみている。

VII期 7世紀後葉～7世紀末葉

S H18・19・20・21がある。本調査区においての竪穴住居の最終期である。竪穴は主軸方位を、N-3°30'-W-N-20'-Wの範囲にもつ。面積については、16m²～18.5m²を測る。すなわち、当該期の竪穴住居は、規模・方向の統一性が強いと言える。

VIII期 8世紀後半

調査区南側に掘立柱建物S B 1が建てられる。S B 2の時期については、明らかにし得ないが、S B 1との方位の近似から大きく時期が懸隔たることは無いと判断しておく。

IX期 11世紀～12世紀前半

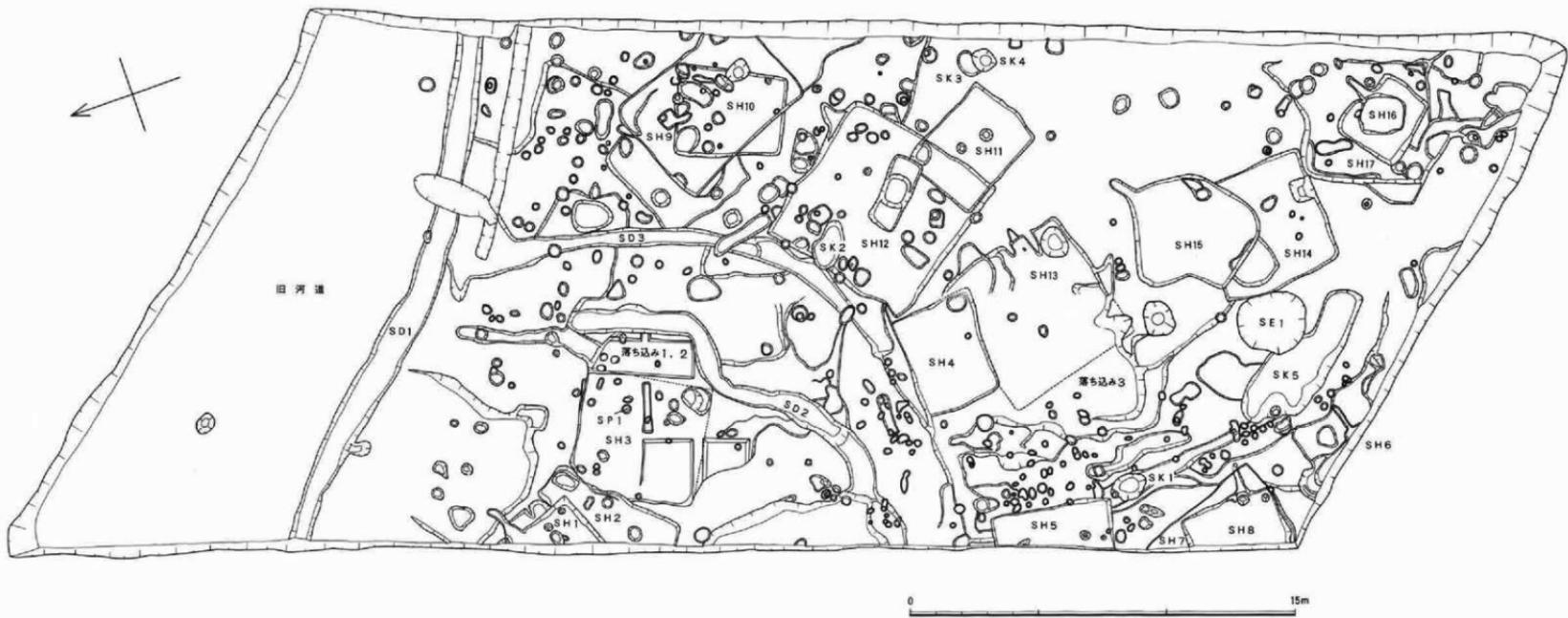
S K 2・6・7・9がある。時期の確定できる遺構のなかでは、VII期以降、当該期に致るまでの間に営まれたものは存在しない。

X期 18世紀～19世紀

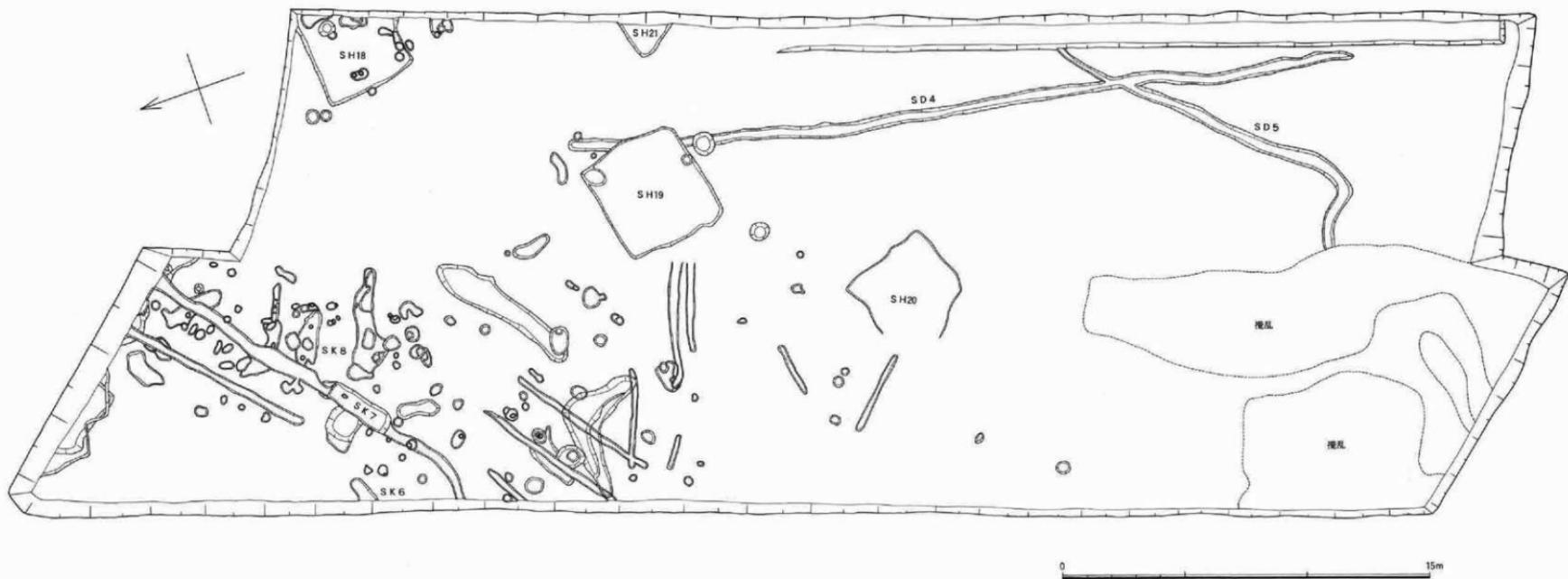
S K 5およびS E 1が存在する。S K 5から出土した炉壁片・鐵滓等は、江戸期から大正期にかけて当地で営まれていたという鉄物業に関連する遺物であると考えられる。

以上、大変大雑把であるが、今回の調査区内においての遺構の変遷をまとめてみた。それによると、本調査区においての遺跡の形成は布留期に開始され、古墳時代後期に竪穴住居の急激な増加をみる。以降、奈良時代後半、間を経て平安時代中・後期、江戸時代後期の遺構が残されていることが判明した。

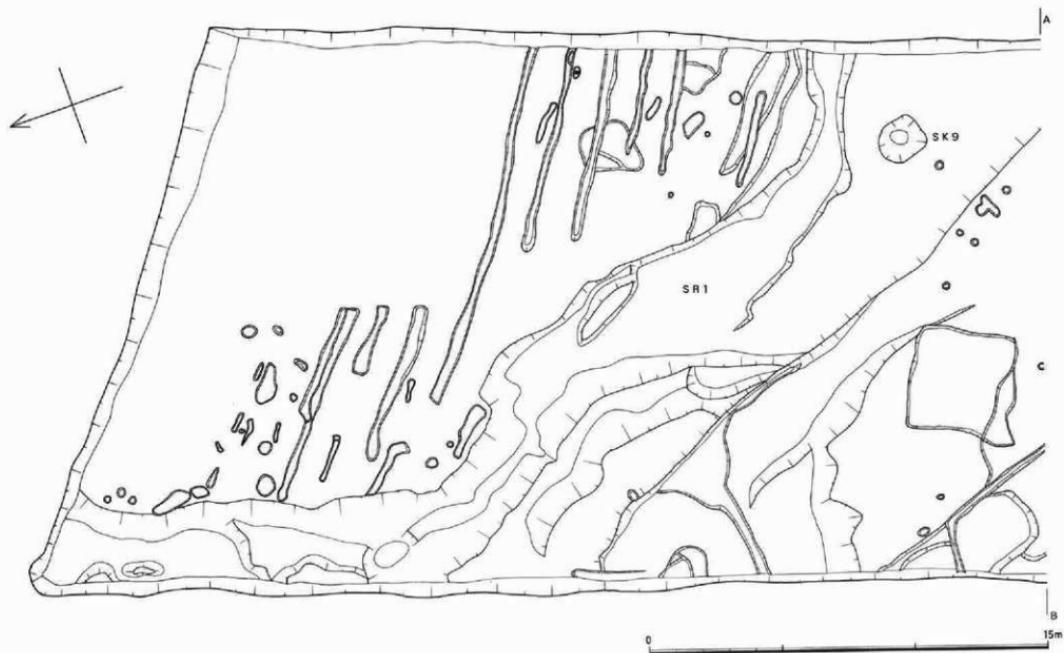
図 面



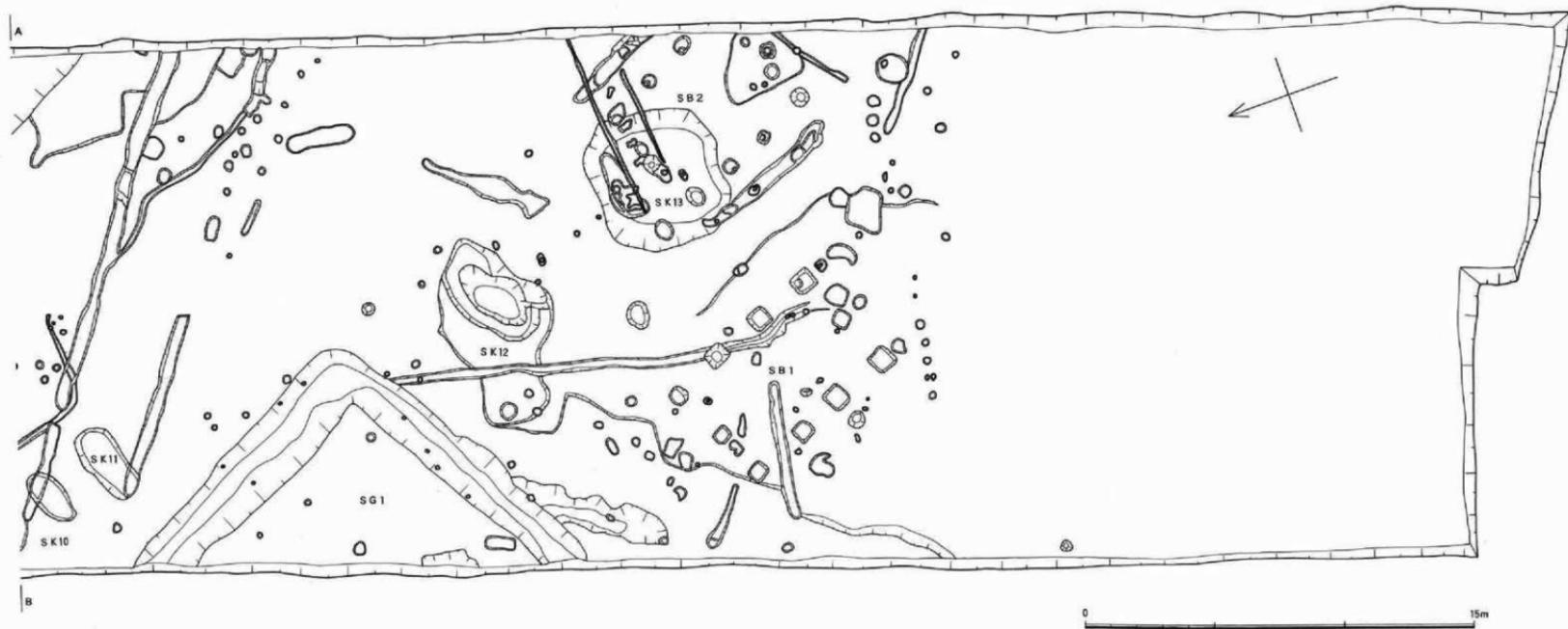
T1・4 トレンチ造構図



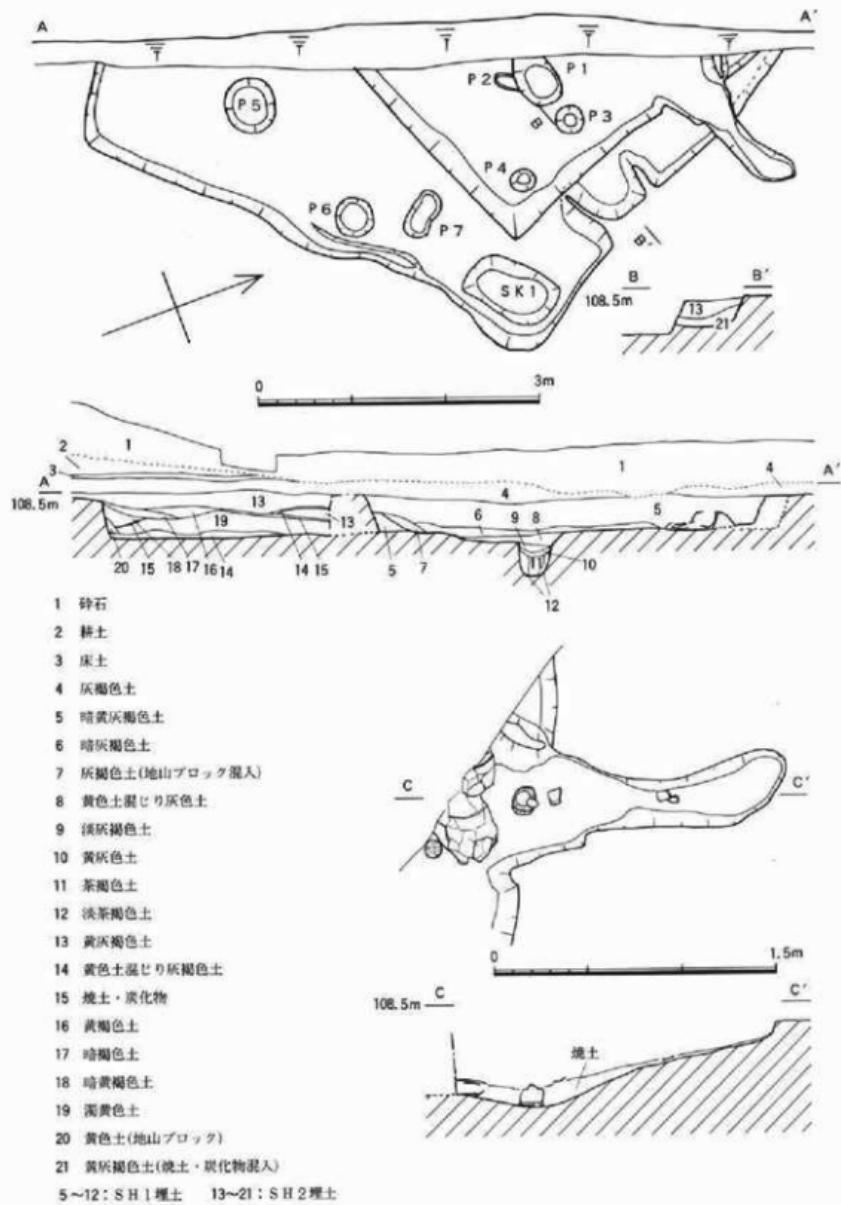
T2・5トレンチ造構図



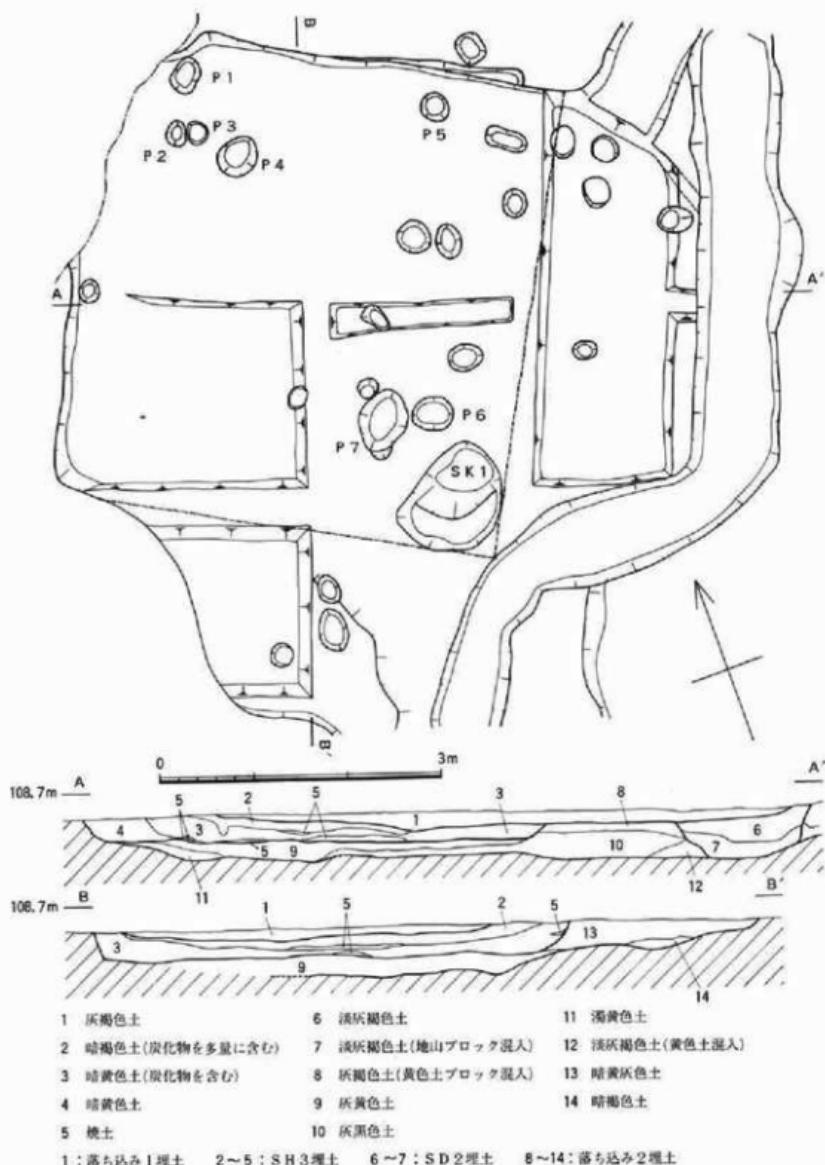
T3・6トレンチ造構図



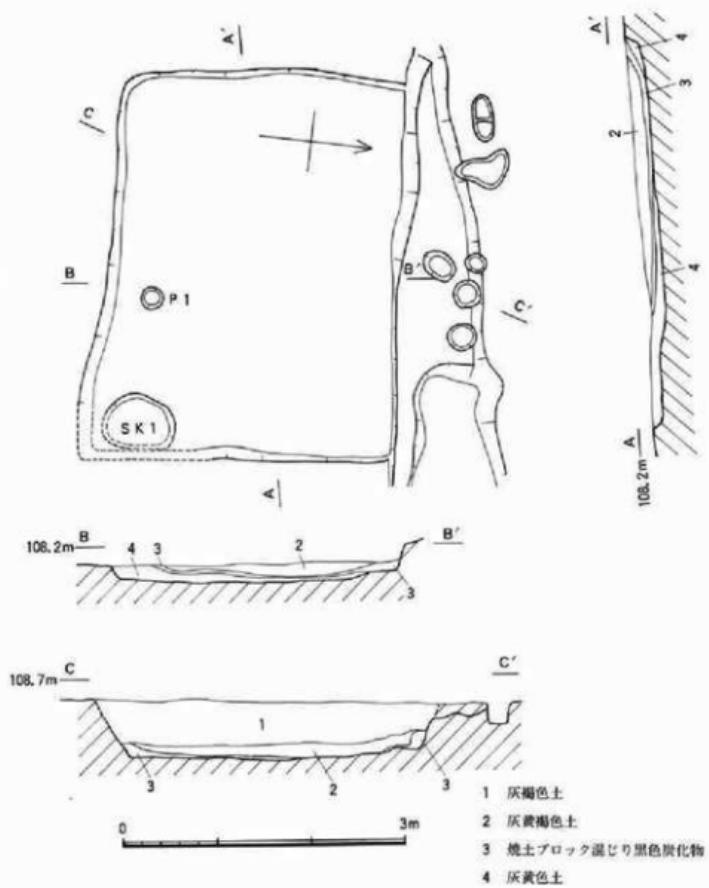
T3・6トレンチ遺構図



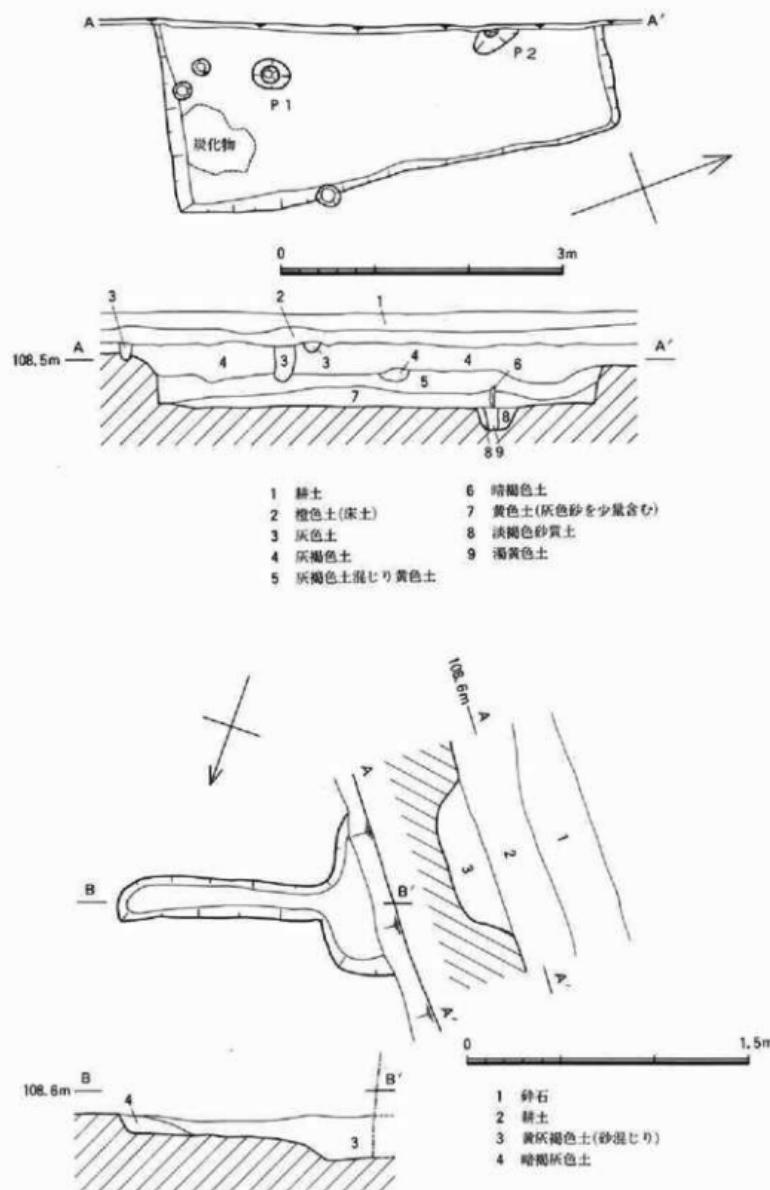
SH 1・2実測図



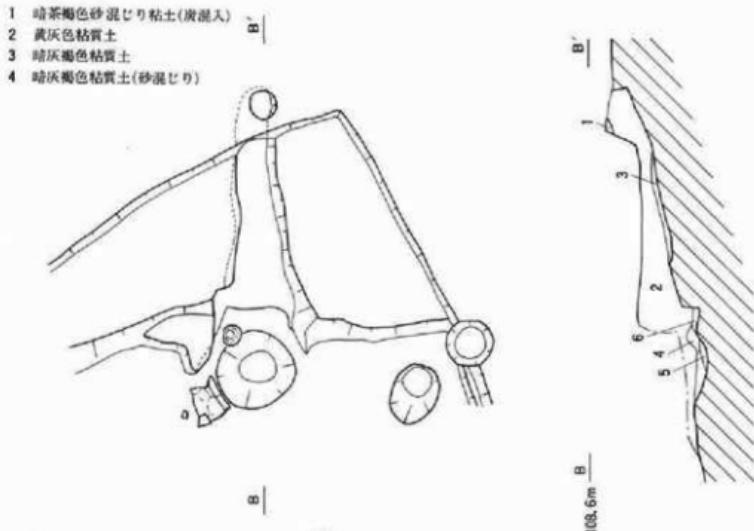
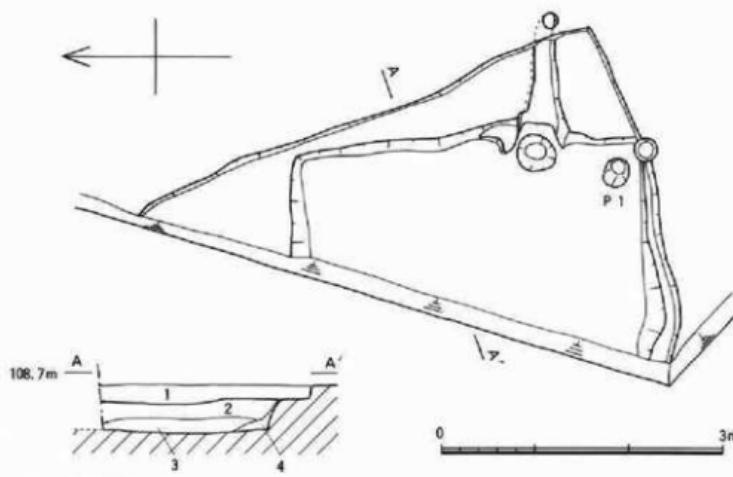
S H 3, S D 2, 落ち込み1・2実測図



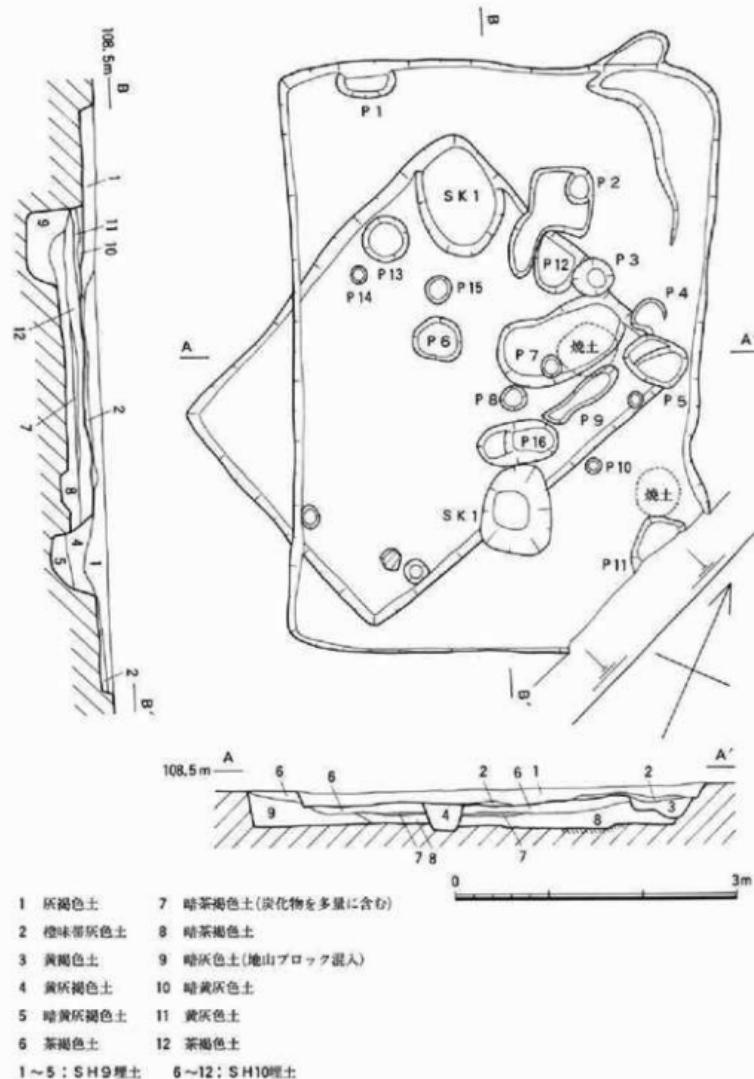
SH 4 実測図



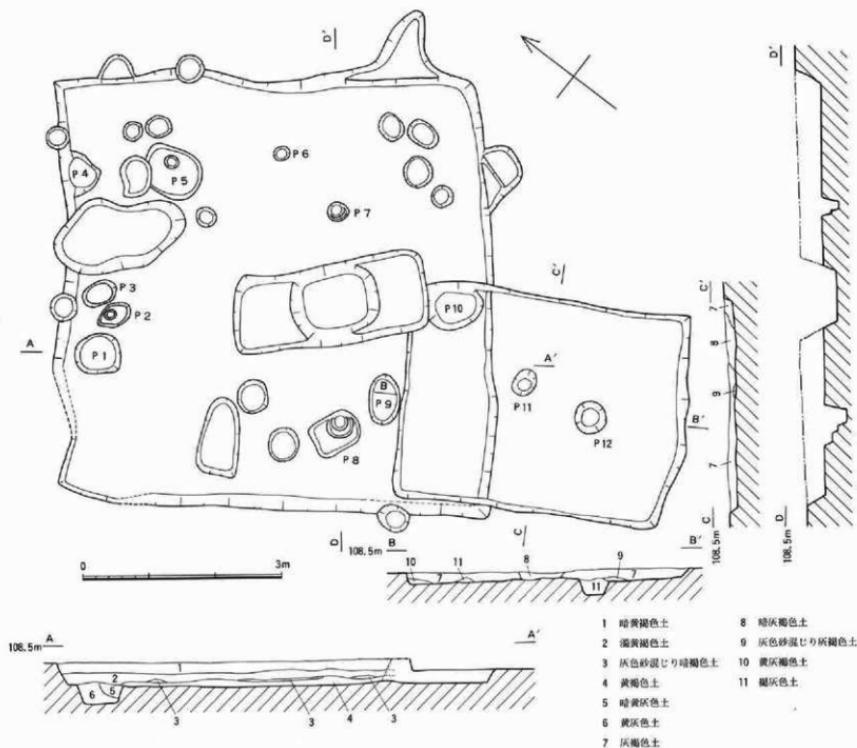
SH 5・6 実測図



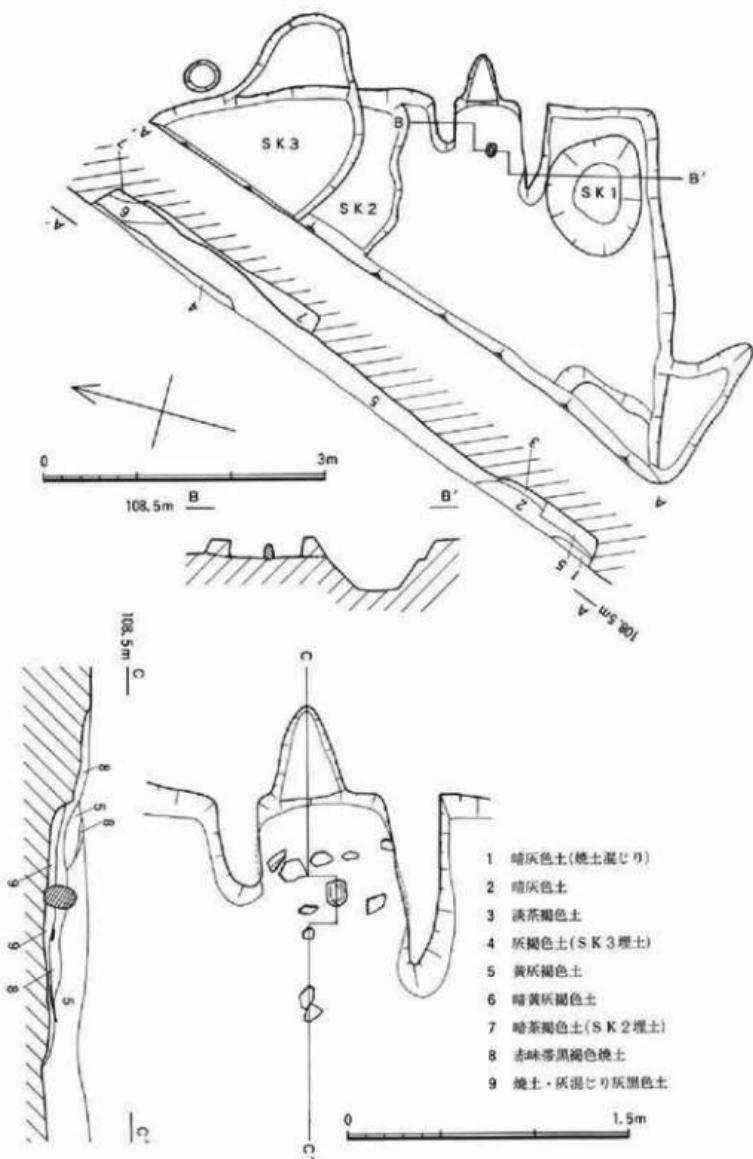
SH7・8 実測図



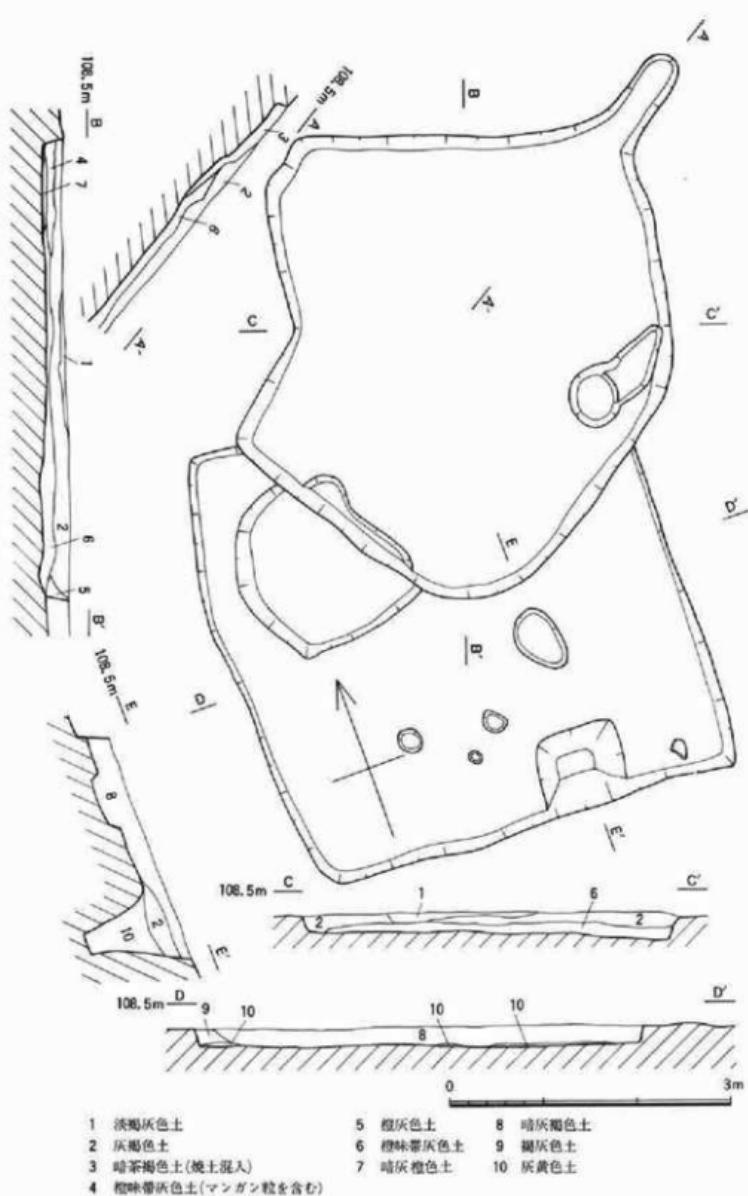
SH 9・10実測図



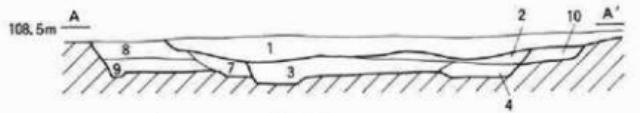
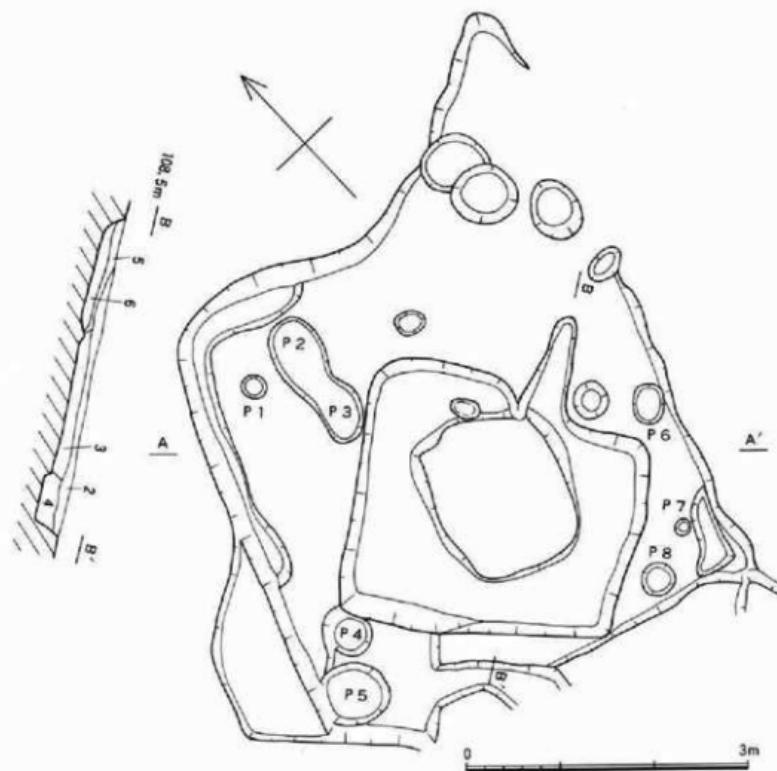
S H11 · 12測量圖



S H13実測図

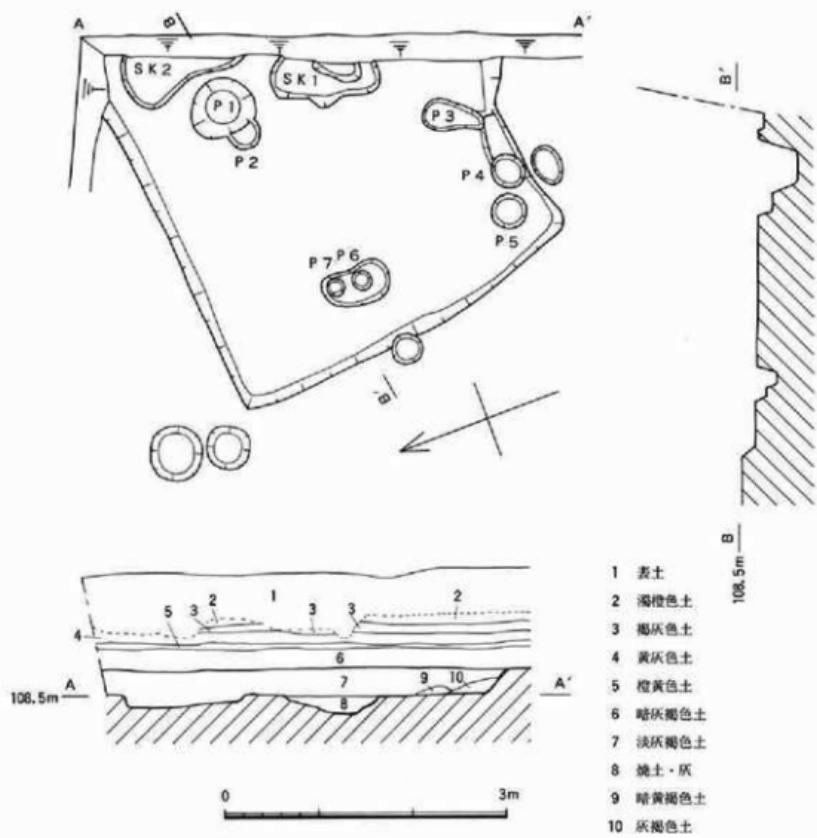


SH14・15実測図

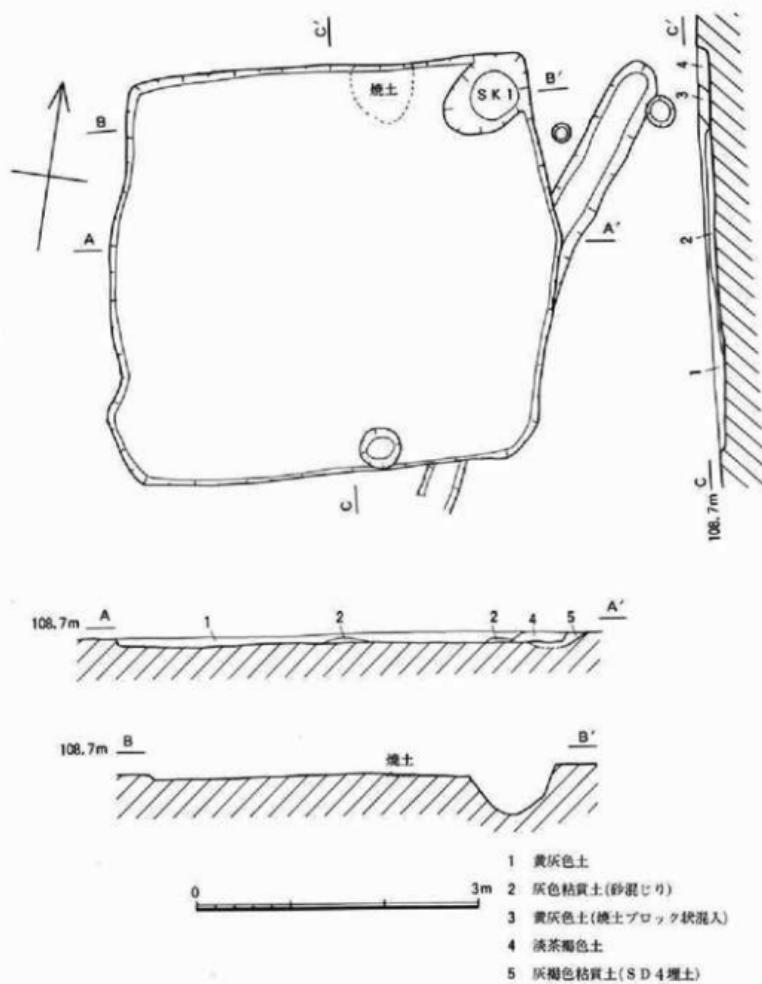


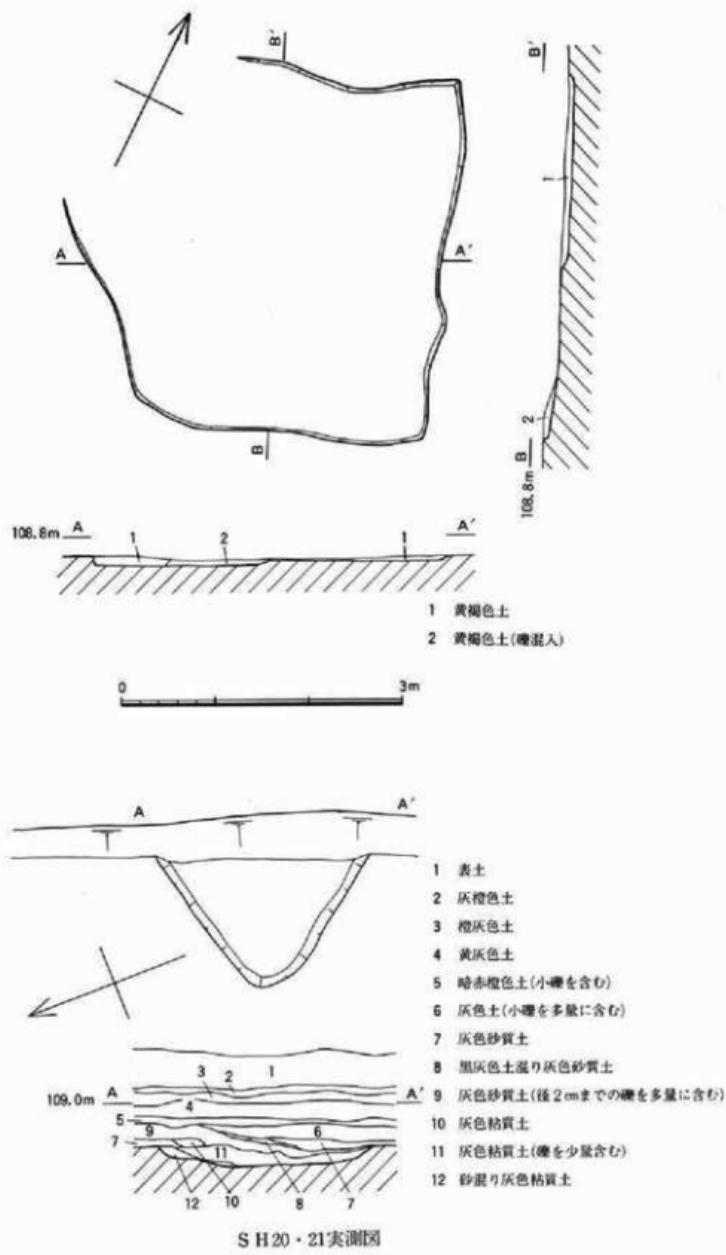
1：落ち込み埋土 2～6：SH16埋土 7～10：SH17埋土

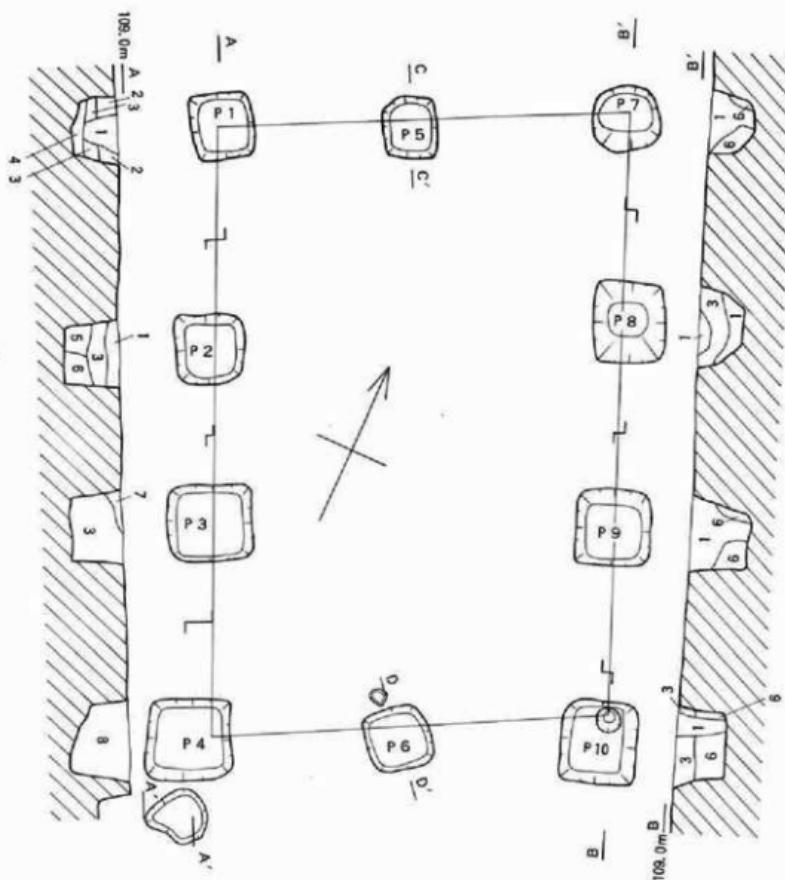
SH16・17実測図



S H 18実測図

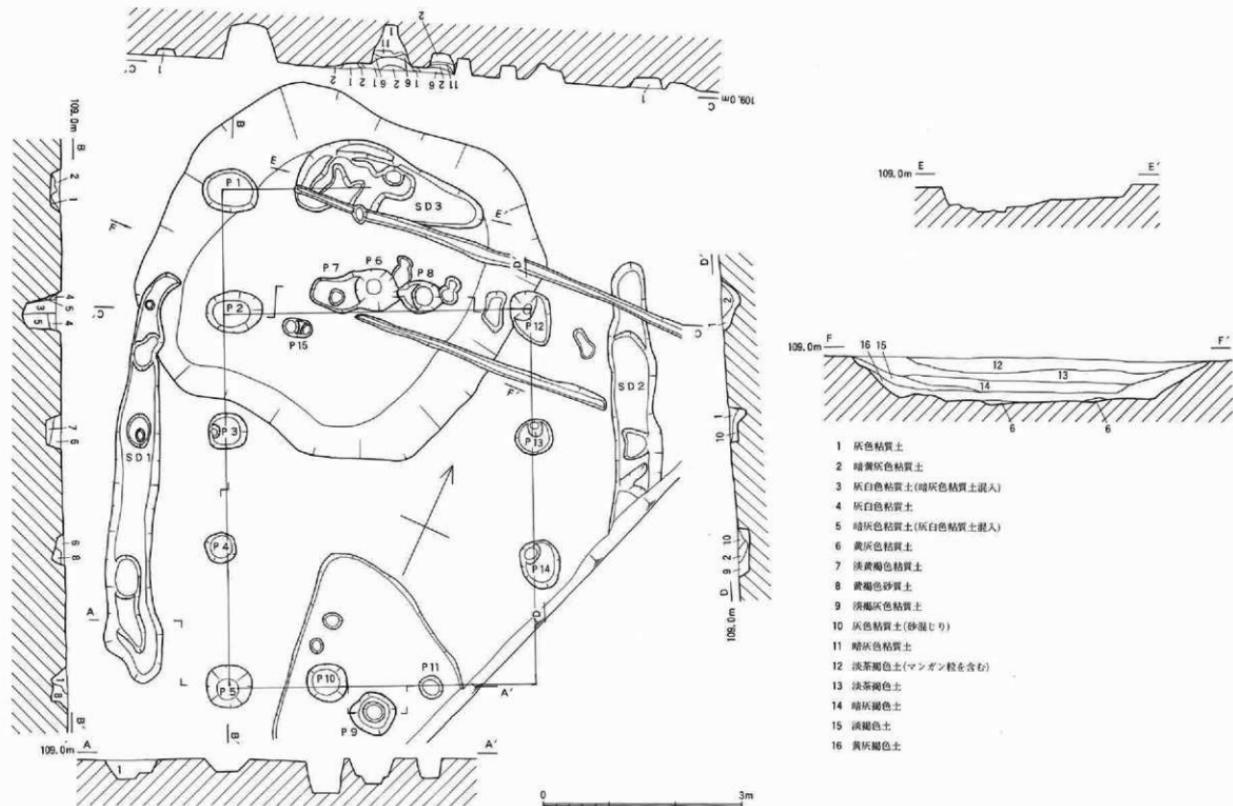




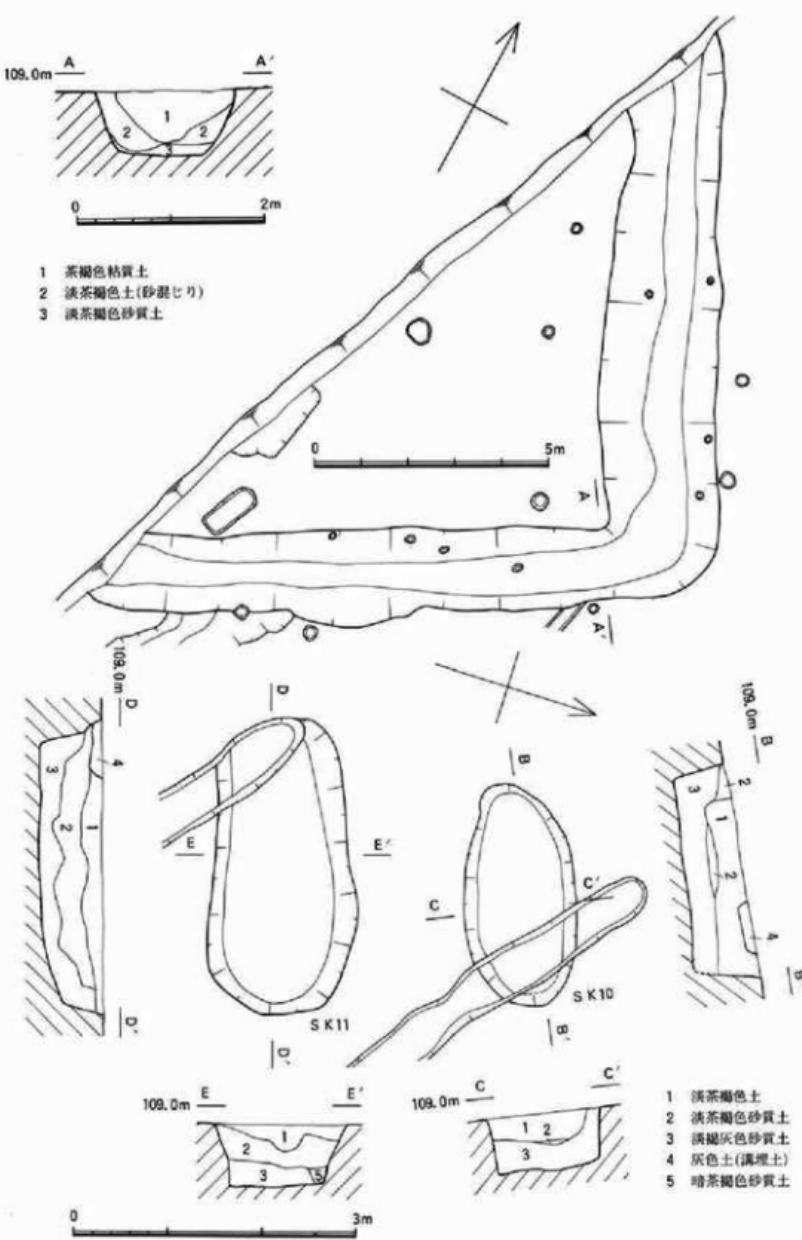


- 1 灰色粘質土
- 2 濁橙灰色粘質土
- 3 橙灰色粘質土
- 4 濁灰色粘質土
- 5 灰白色粘質土
- 6 淡茶褐色粘質土
- 7 黄灰色粘質土
- 8 橙灰色粘質土・暗灰色粘質土互層
- 9 灰白色粘質土(橙色粘質土ブロック混入)
- 10 灰色粘質土・暗灰色粘質土互層
- 11 灰褐色粘質土

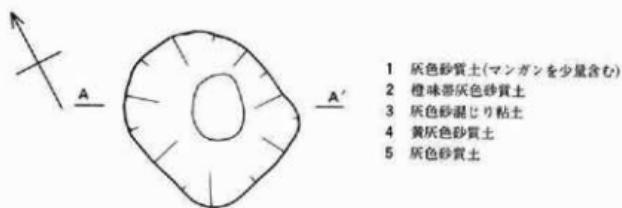
S B I 実測図



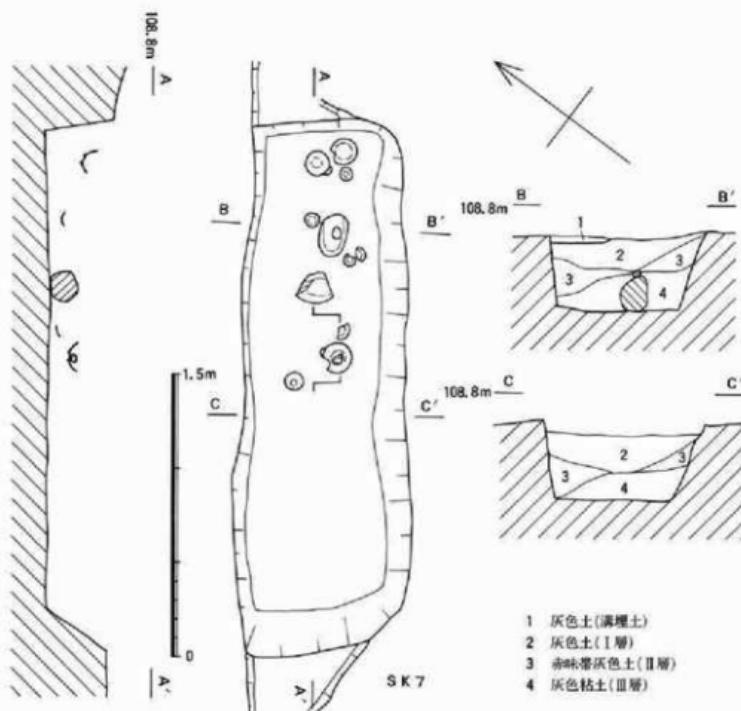
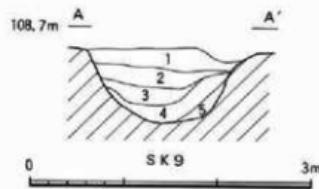
S B 2, S K13実測図



S G 1, SK 10・11実測図

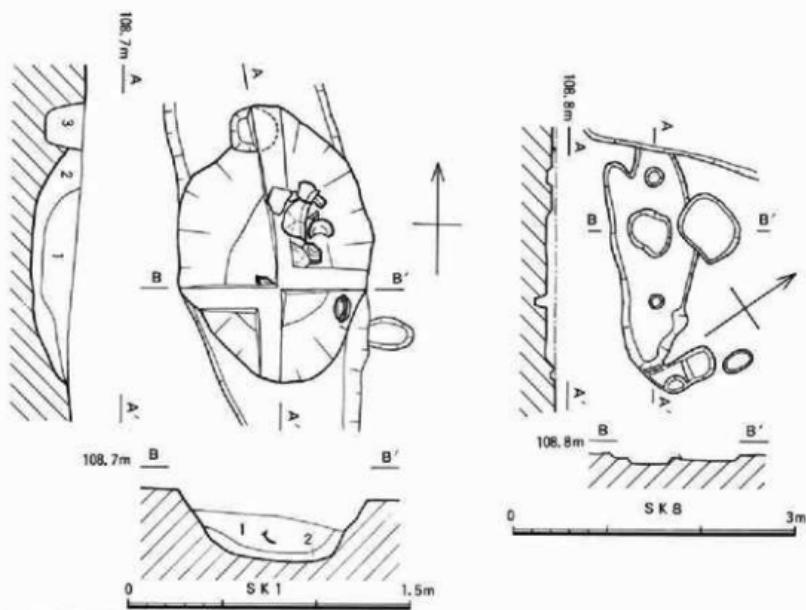


- 1 灰色砂質土(マンガンを少量含む)
- 2 橙味帶灰色砂質土
- 3 灰色砂混じり粘土
- 4 黄灰色砂質土
- 5 灰色砂質土



- 1 灰色土(溝埋土)
- 2 灰色土(Ⅰ層)
- 3 油味帶灰色土(Ⅱ層)
- 4 灰色粘土(Ⅲ層)

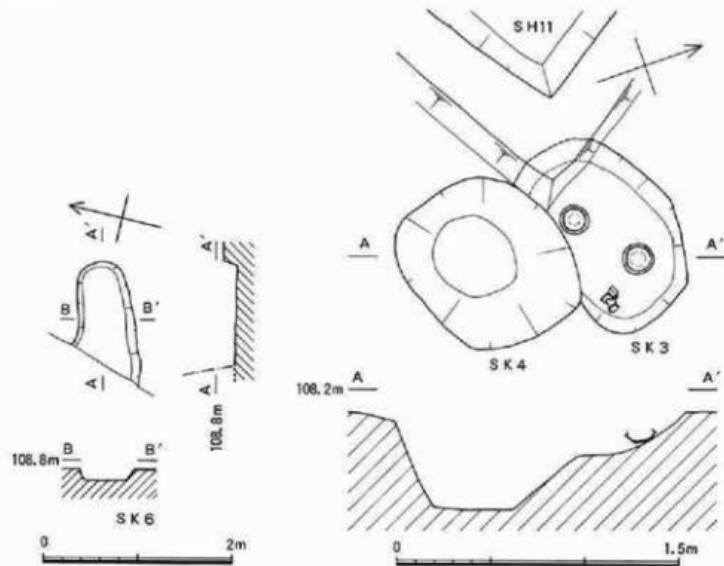
SK 7・9実測図



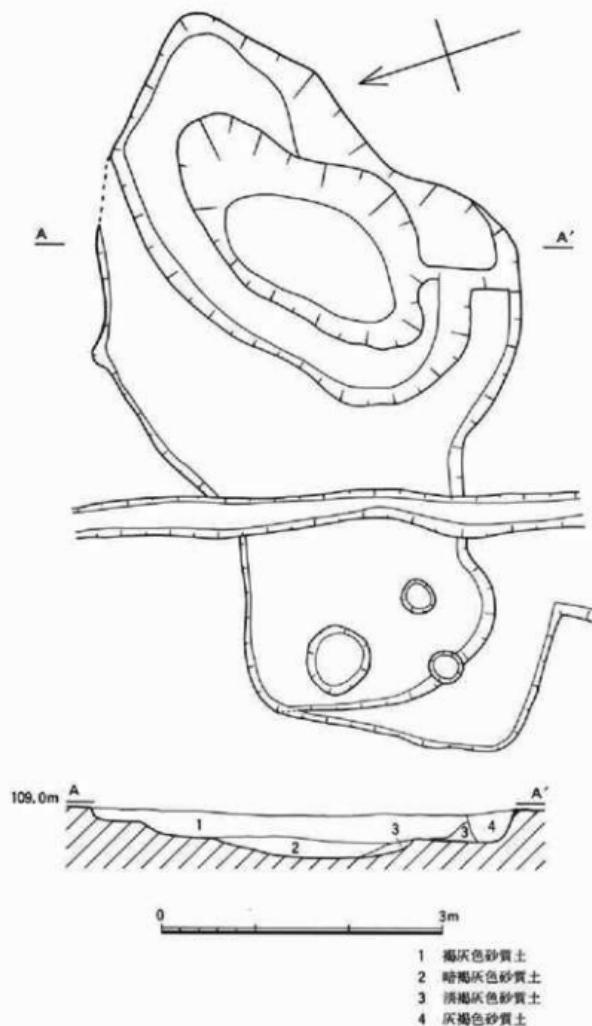
1 暗茶褐色砂混じり粘土(炭化物混入)

2 黄灰色粘土質土

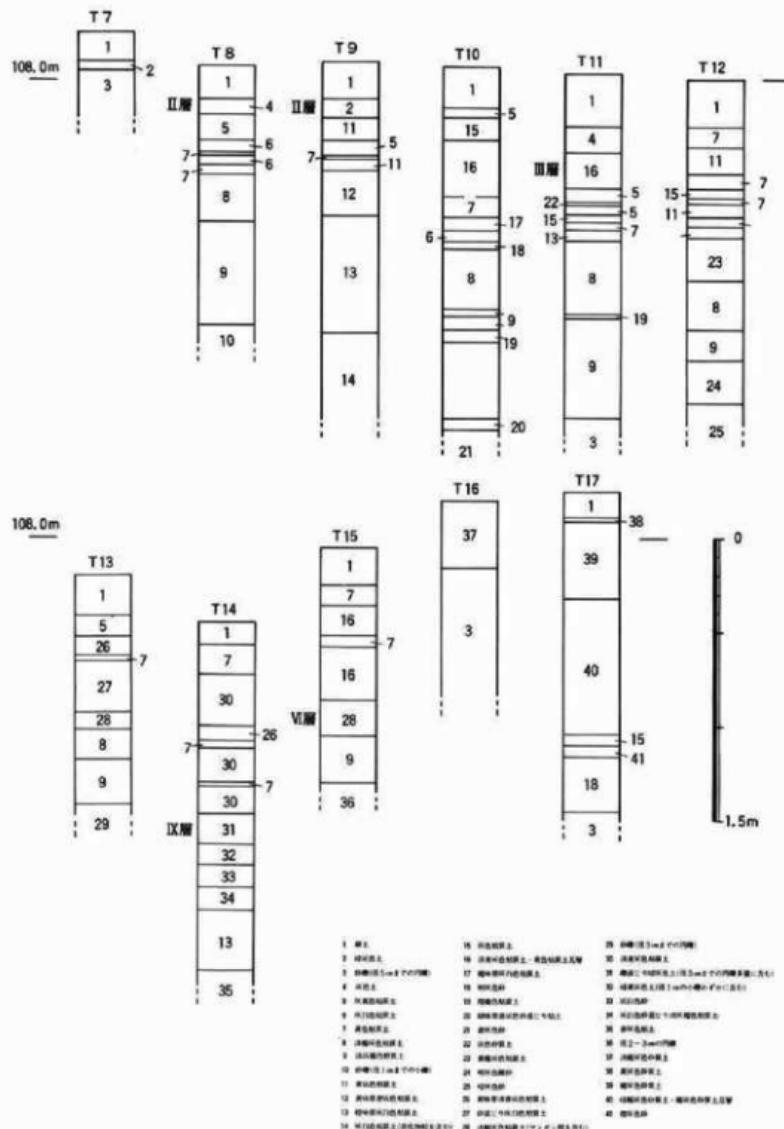
3 暗灰褐色粘土質土



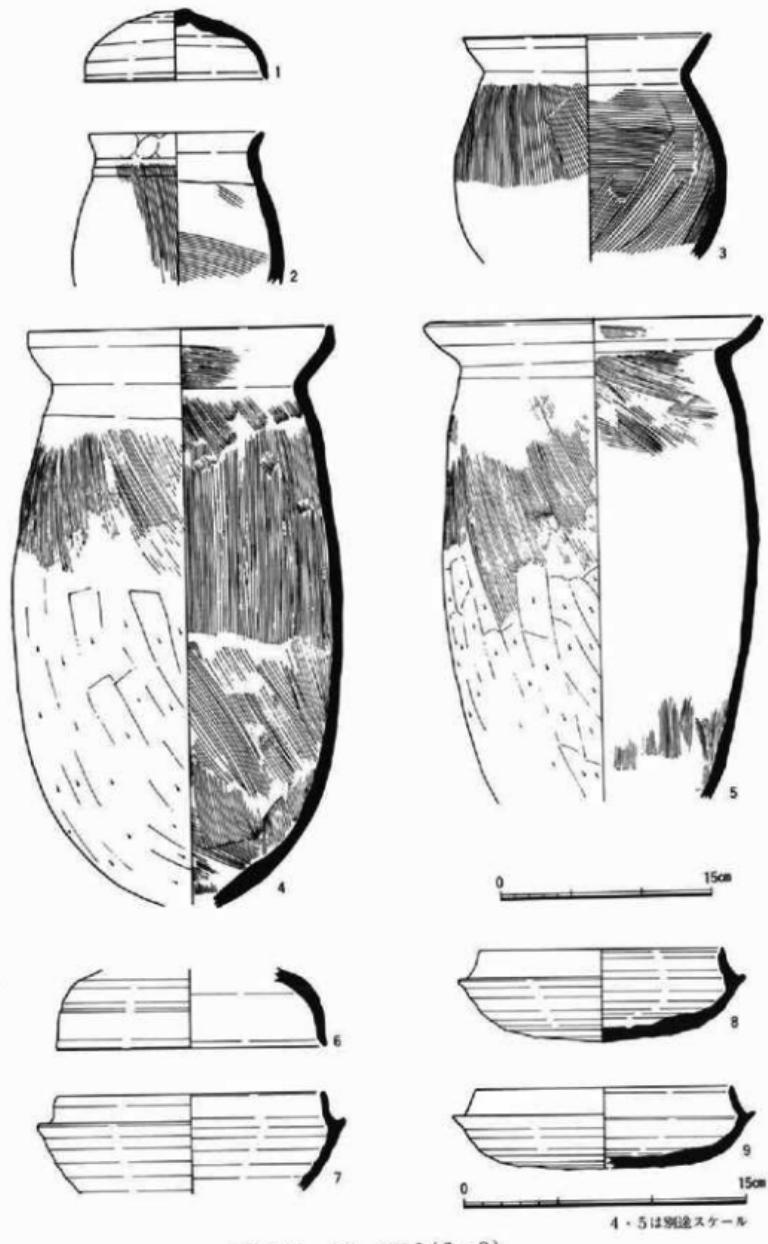
SK 1・3・4・6・8 実測図



S K12実測図

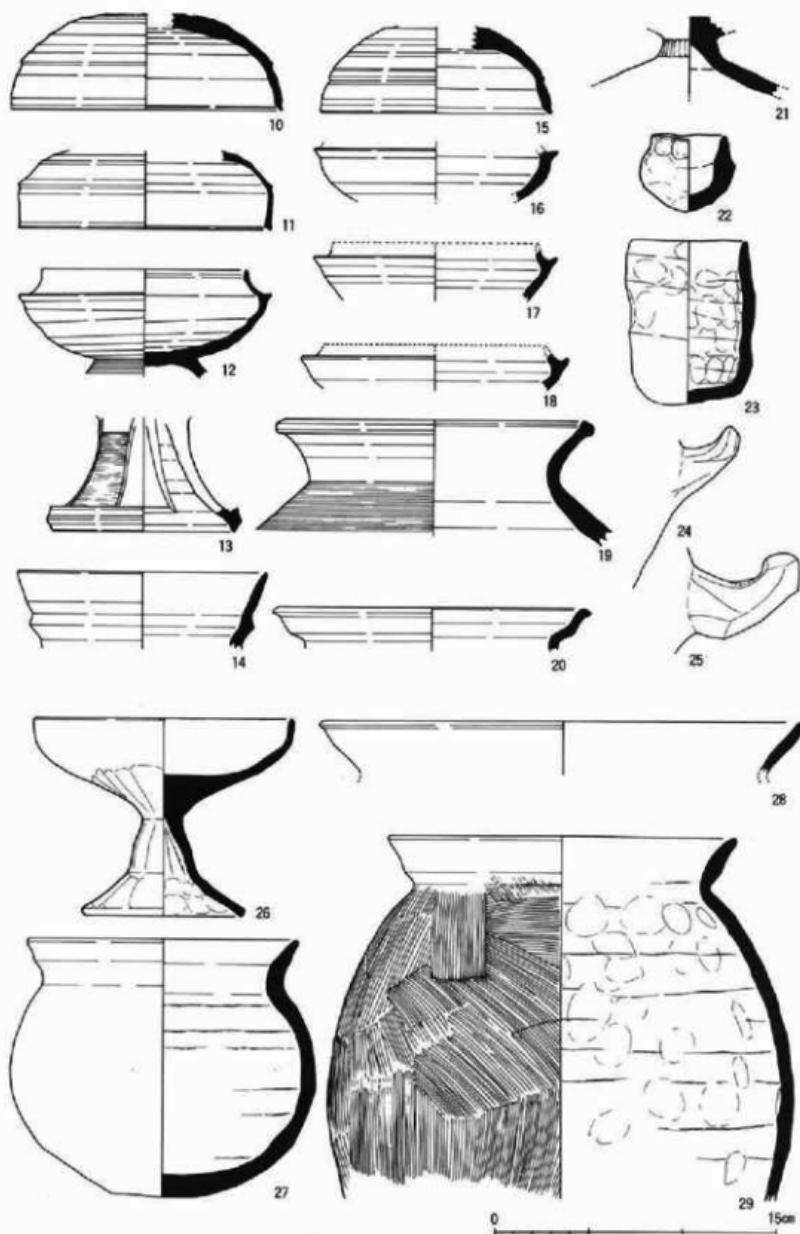


試掘トレンチ土層柱状図

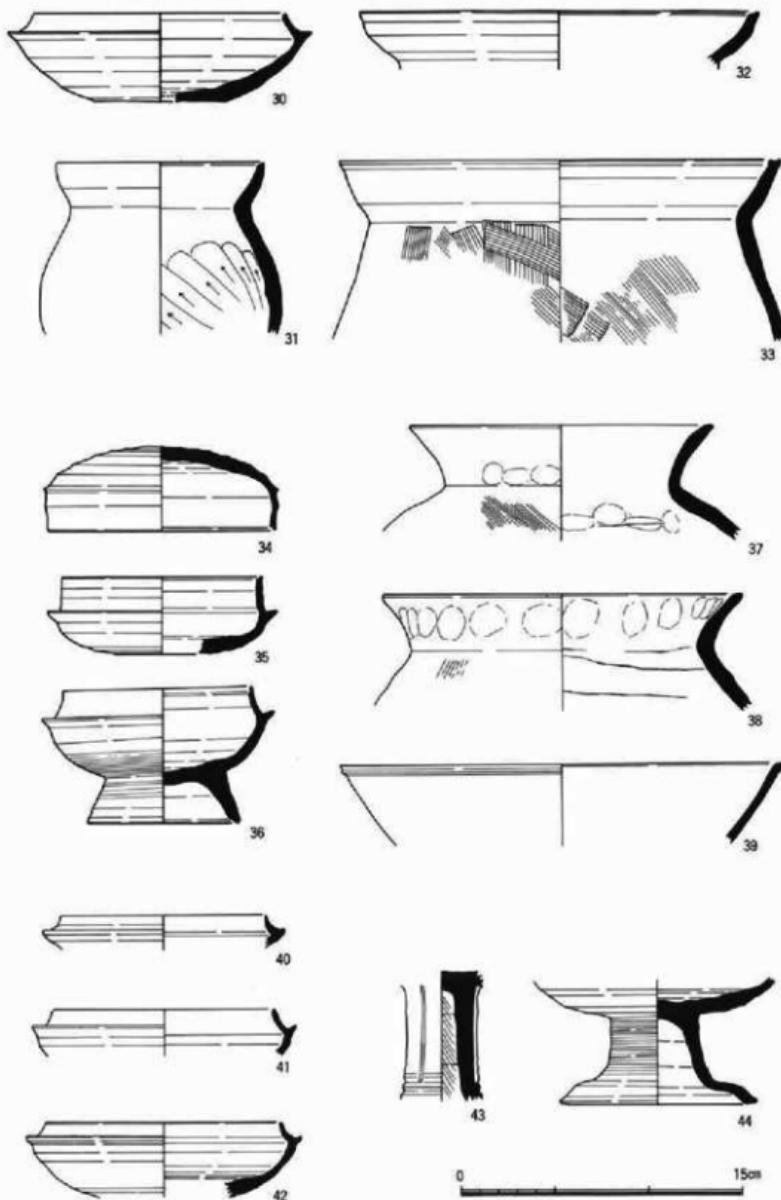


SH1(1~5), SH2(6~9)

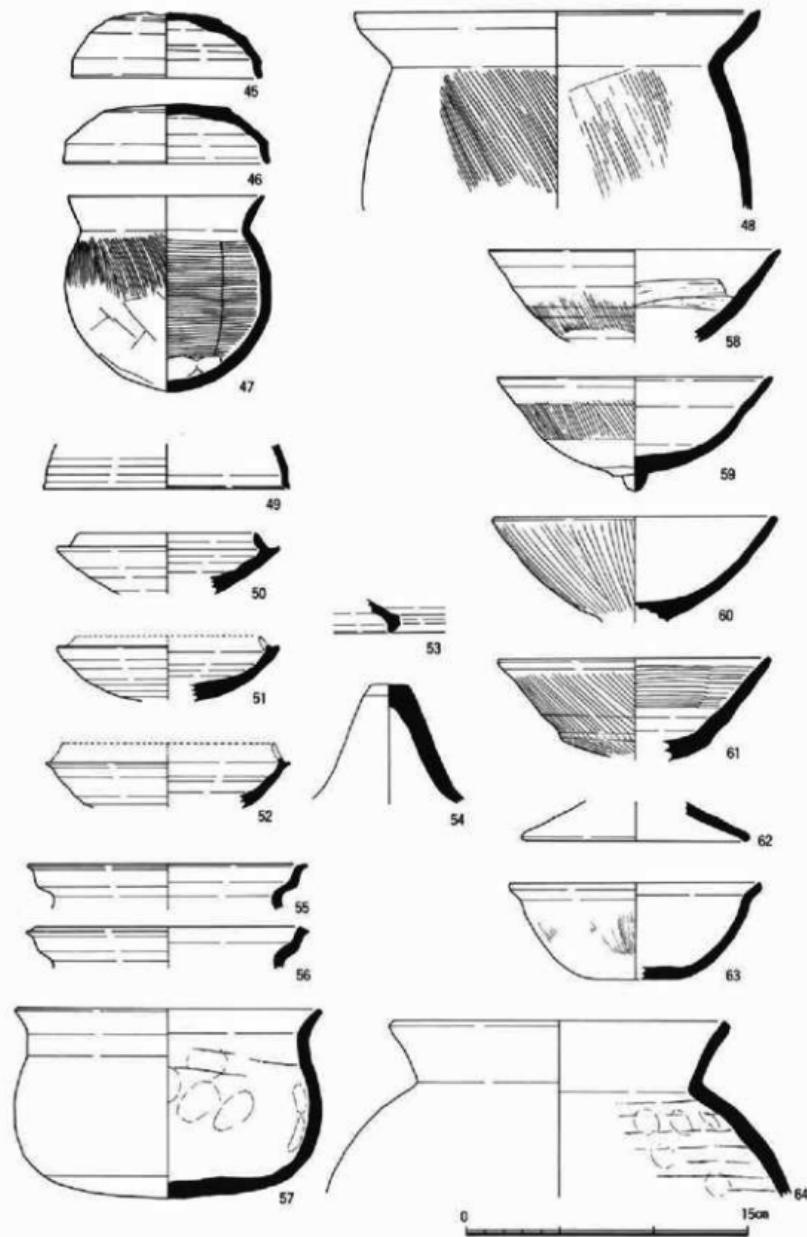
4・5は別途スケール



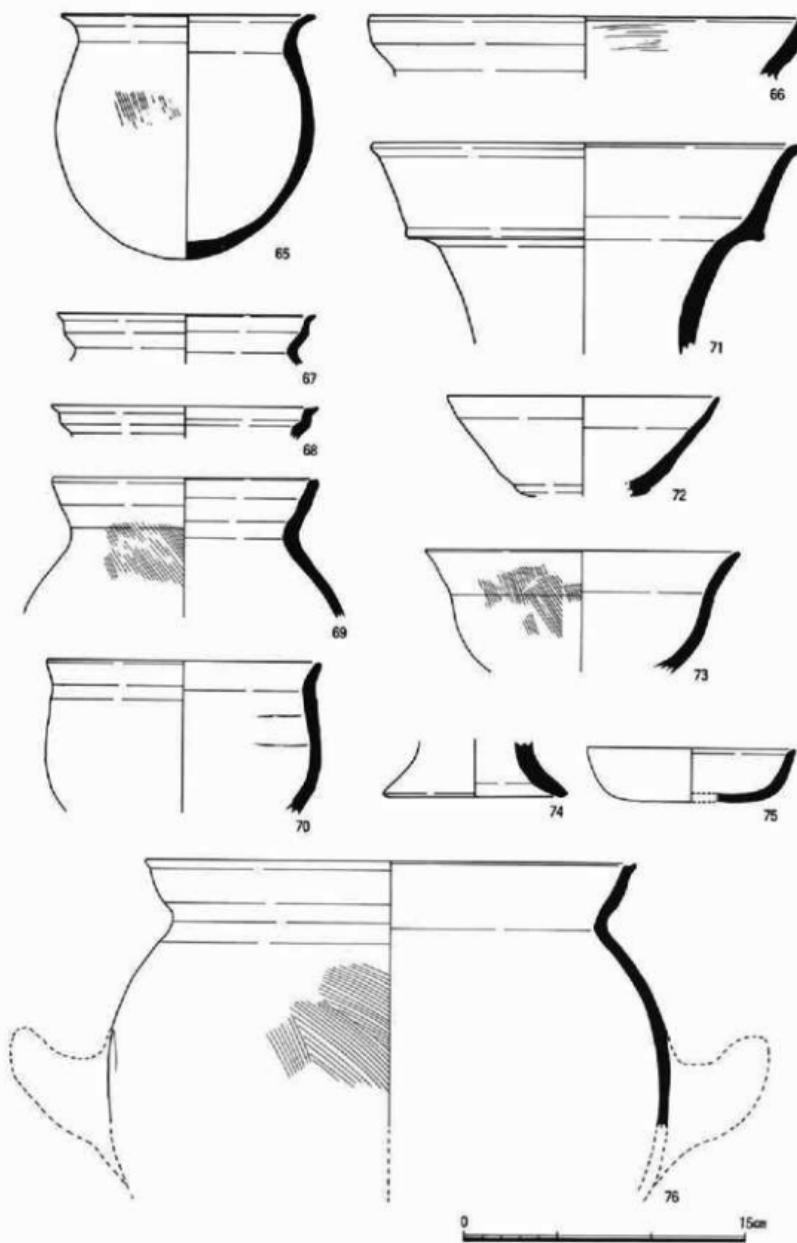
落ち込み I (10~25)、S H 3 (26~29)



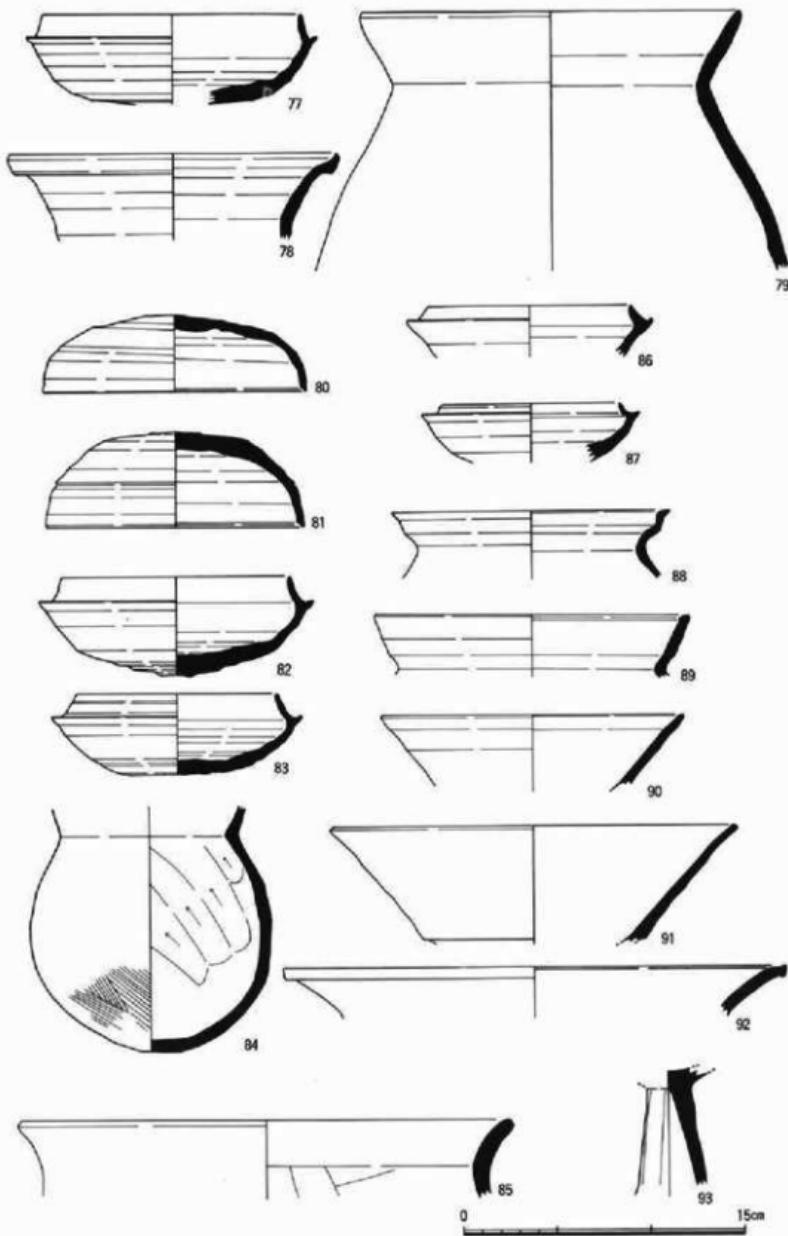
S H 4 (30~33), S H 5 (34~39), S H 7 (40~44)



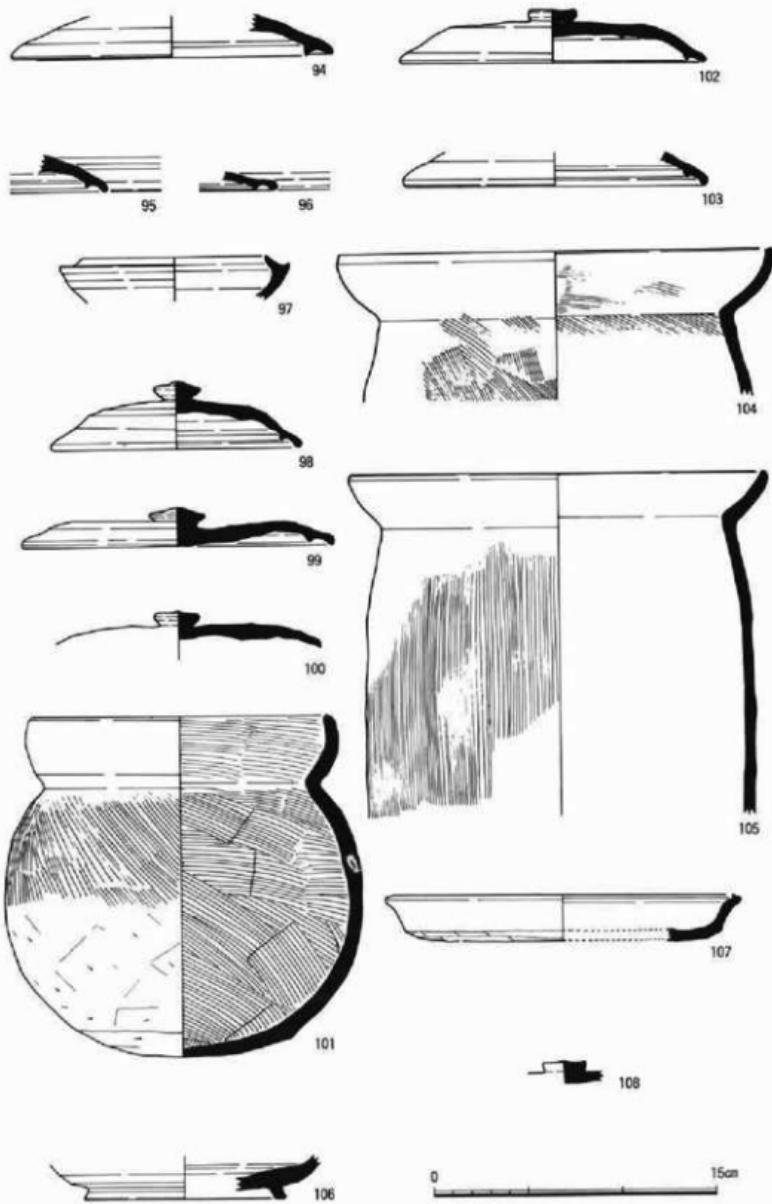
S H 8 (45~48), S H 9 (49~54), S H10(55~64)



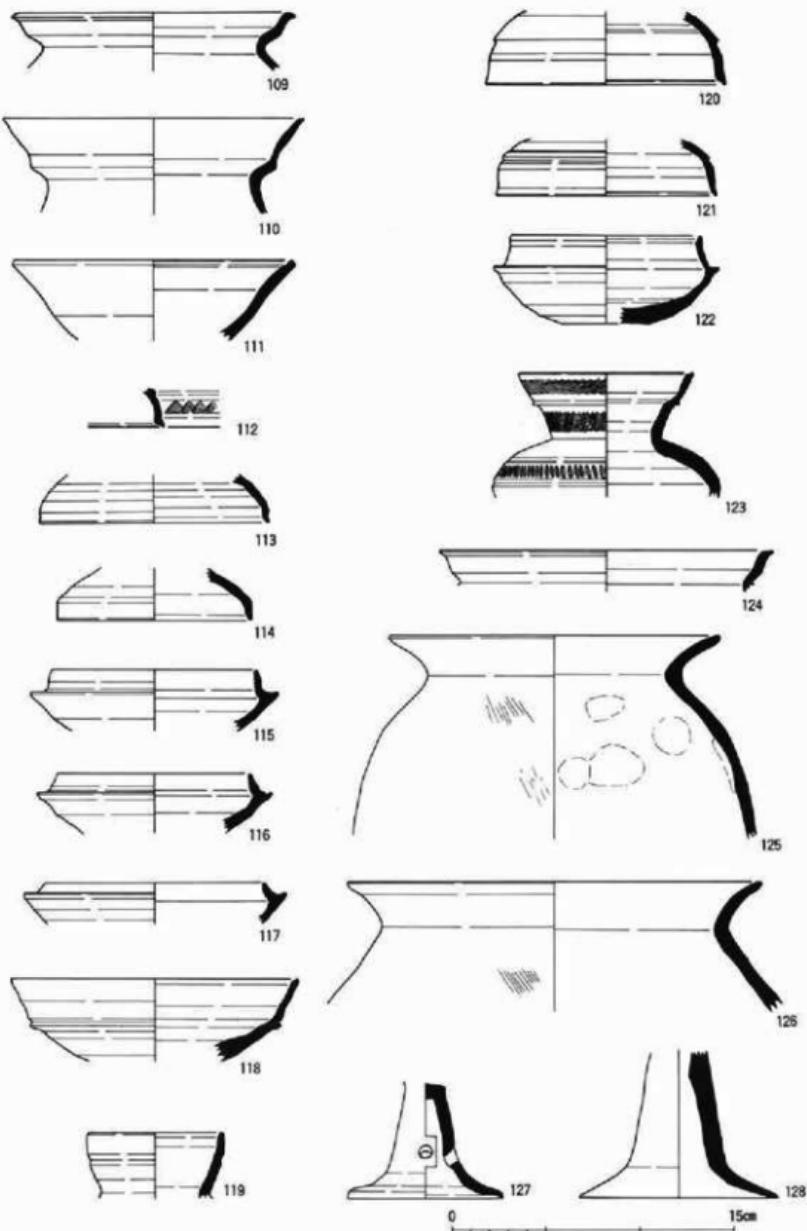
S H11(65~66), S H12(67~76)



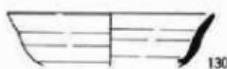
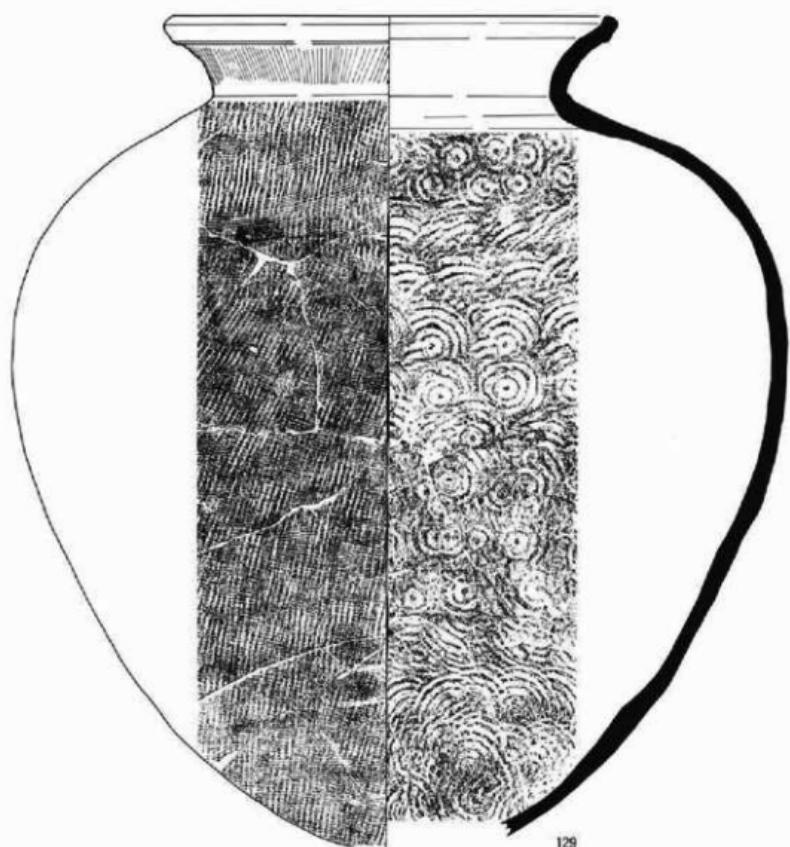
S H13(77~79), S H14(80~85), S H15(86~87), S H17(88~93)



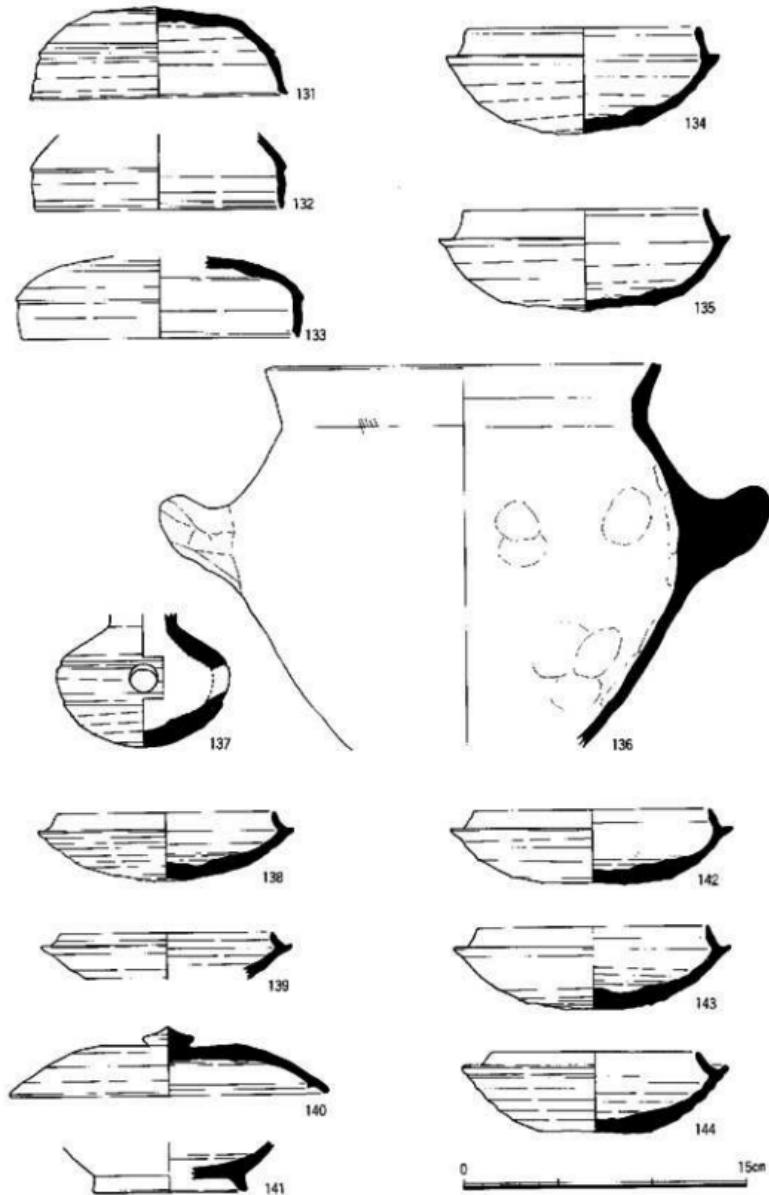
S H18(94~97)、S H19(98~101)、S H20(102~105)、S H21(106)
S B 1(107)、T 6 トレンチ P15(108)



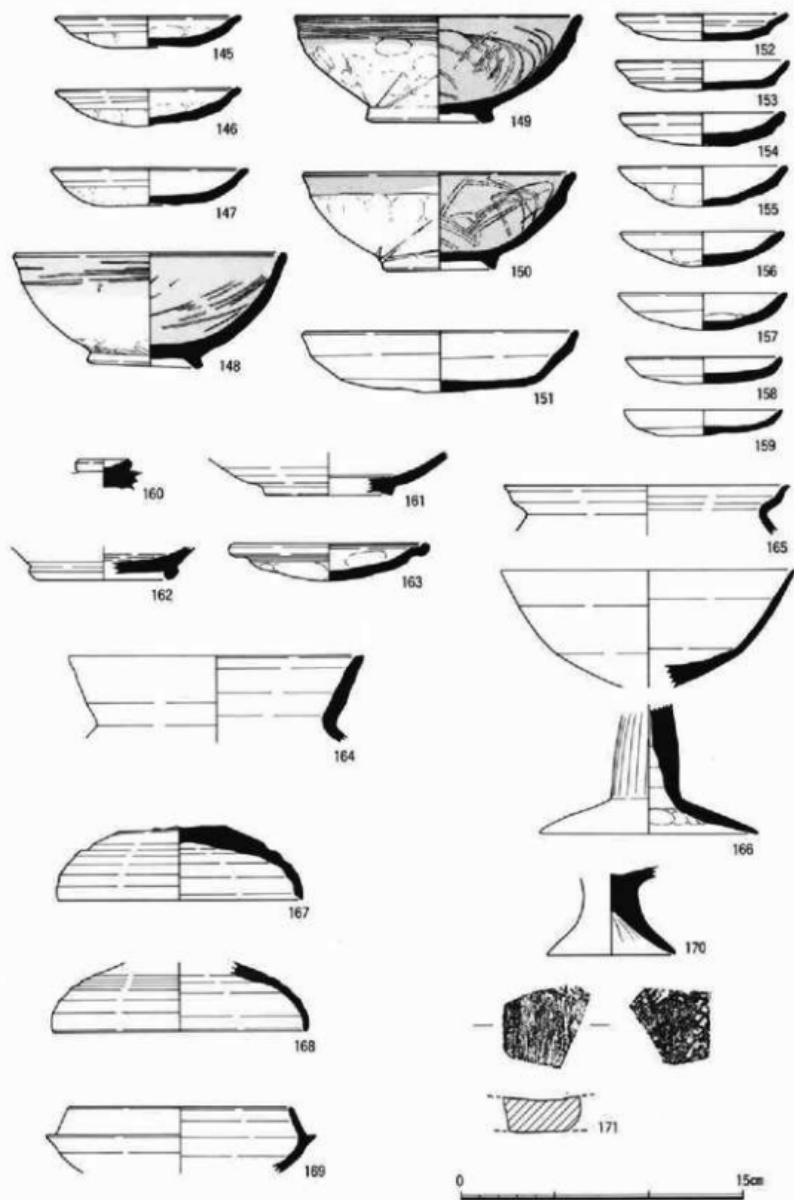
SD 2 (109~119), SD 3 (120~128)



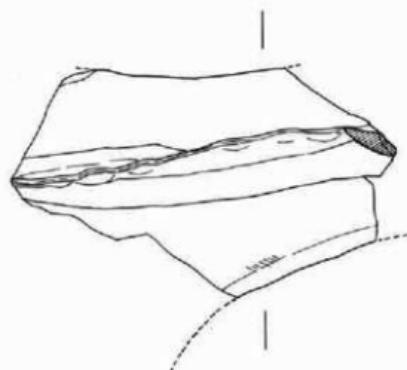
S D 4 (129~130)



SK 1 (131~136), SK 2 (137~141), SK 3 (142~144)



S K 6 (145~148), S K 7 (149~159), S K 9 (160~163), S K 12(164),
S K 13(165~166), S R 1 (167~171)



172



173



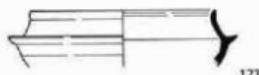
174



175



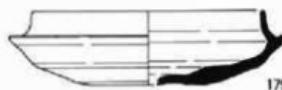
176



177



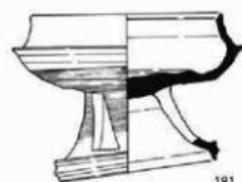
178



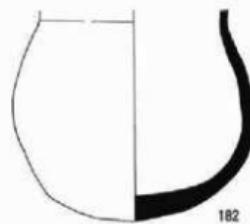
179



180



181



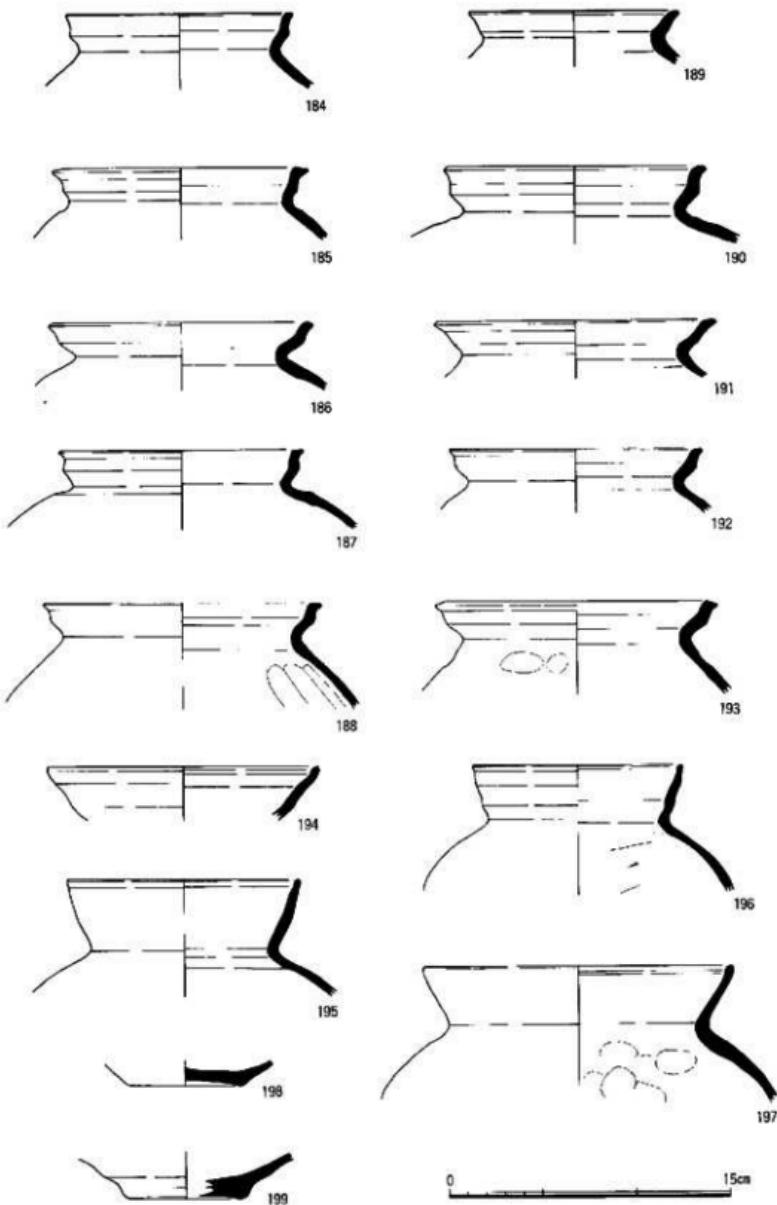
182



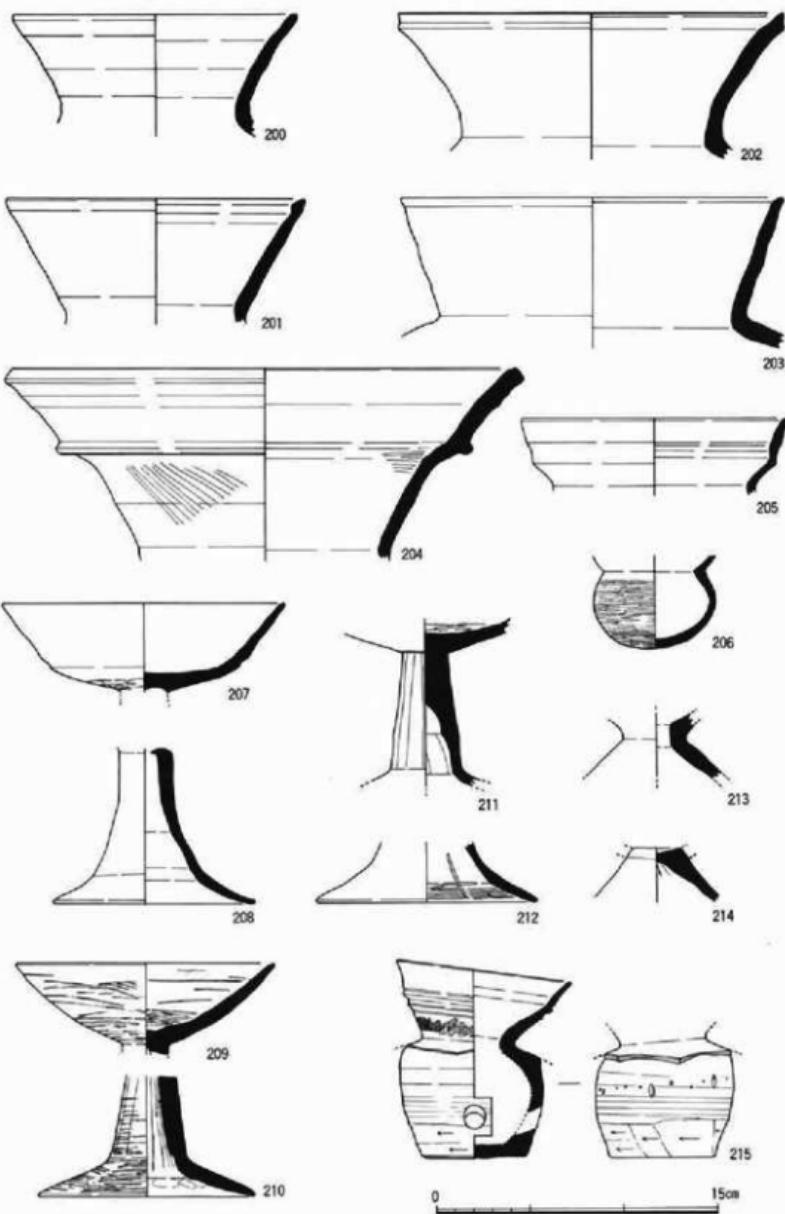
183

0 15cm

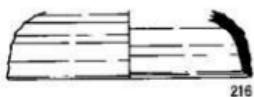
S K 8 (172~174), 落ち込み 3 (175~182), S G 1 (183)



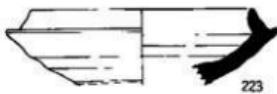
落ち込み 2 (184~199)



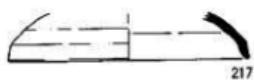
落ち込み 2 (200~215)



216



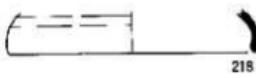
223



217



224



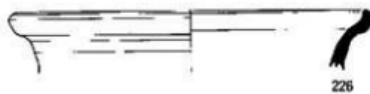
218



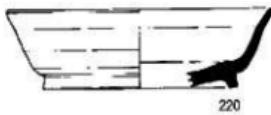
225



219



226



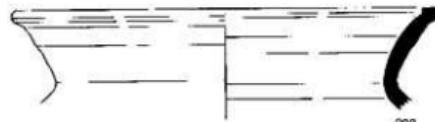
220



227



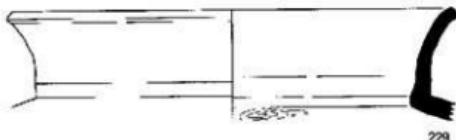
221



228



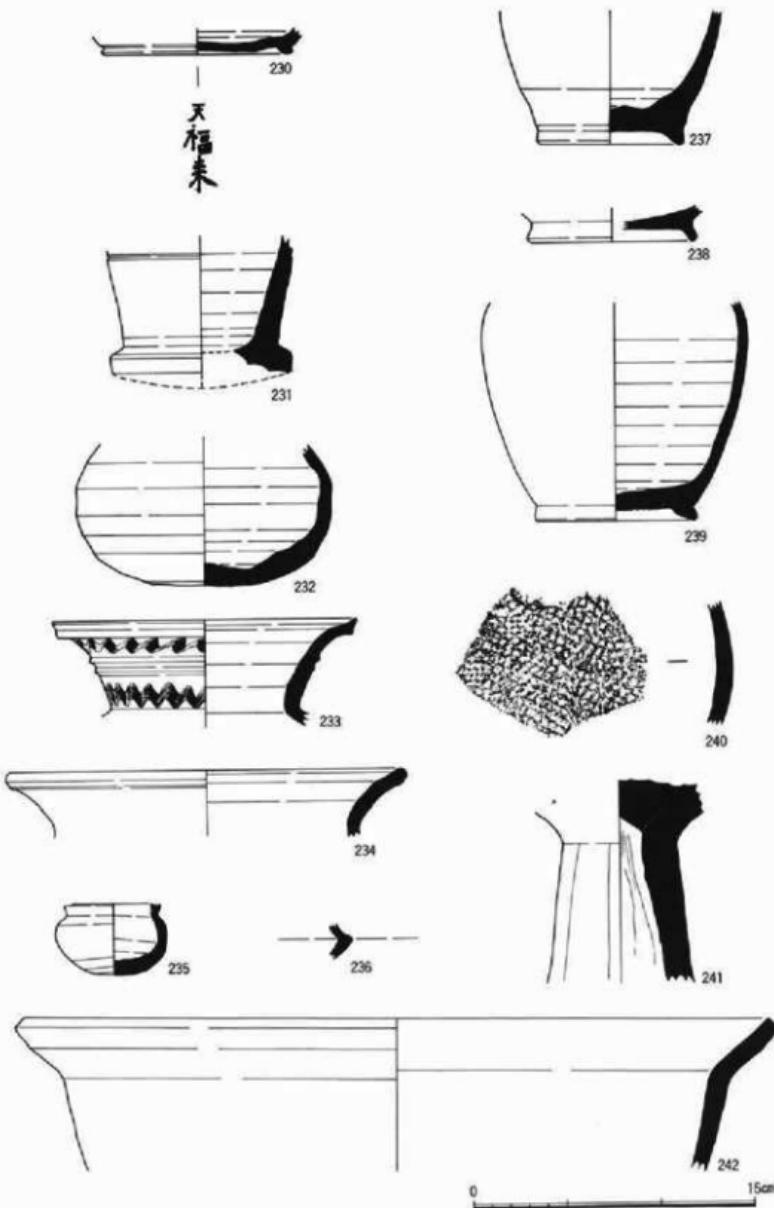
222



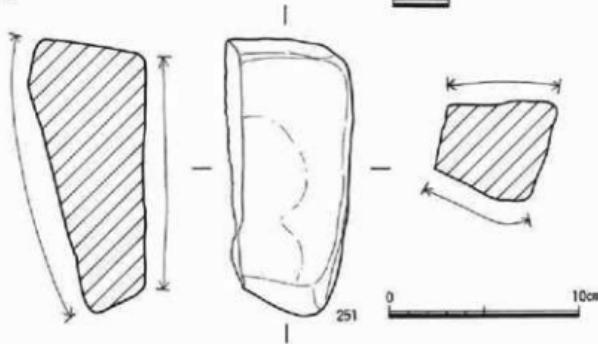
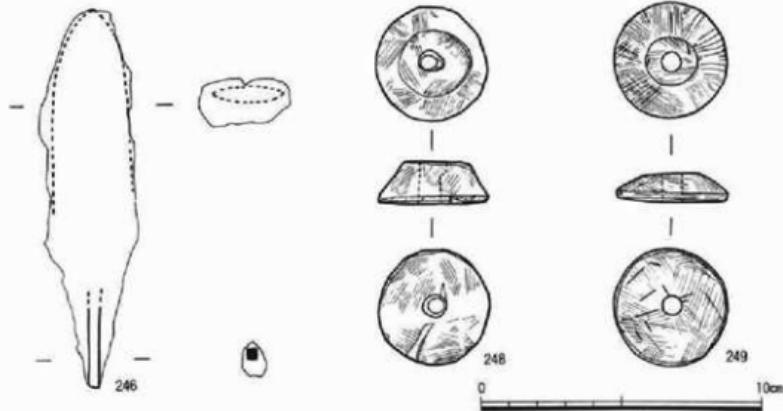
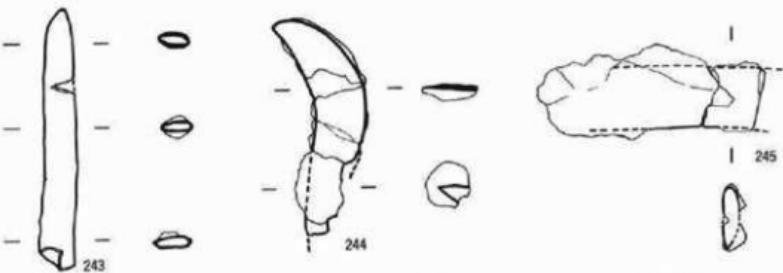
229

0 15cm

旧河道(216~229)



遺物包含層(230~242)



S H 1 (243), S H 3 (244～245, 248～249), S H 8 (251)
落ち込み 2 (246～247) T 1 トレンチ S P 1 (250)

写 真



調査区全景（南西より）



T1 トレンチ全景（北東より）



T1 トレンチ全景（南西より）



T 1 トレンチ遺構群（北東より）



SH 1・2・3（南西より）



SH1・2 (南西より)



SH1 カマド部 (南西より)



S H 3 (西より)



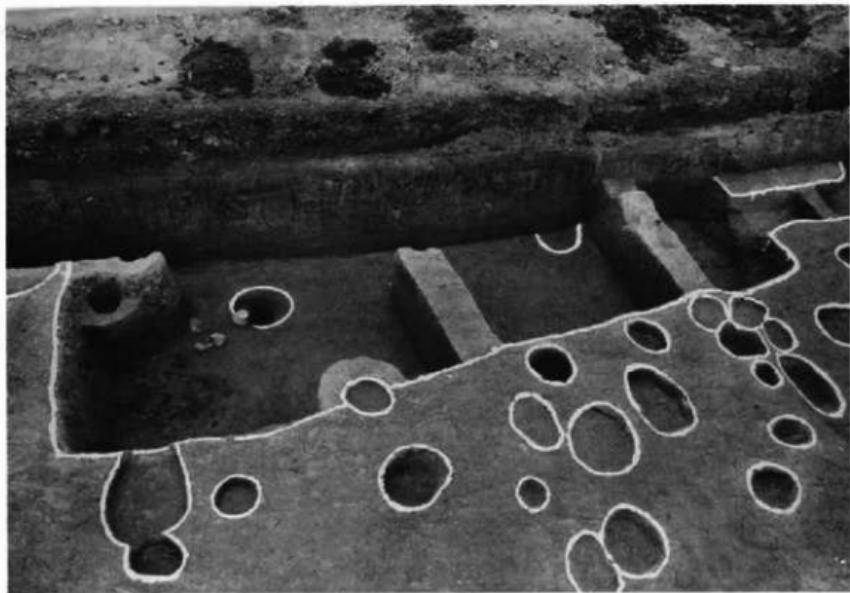
S H 3 土器出土状況 (東より)



SH 4 (西より)



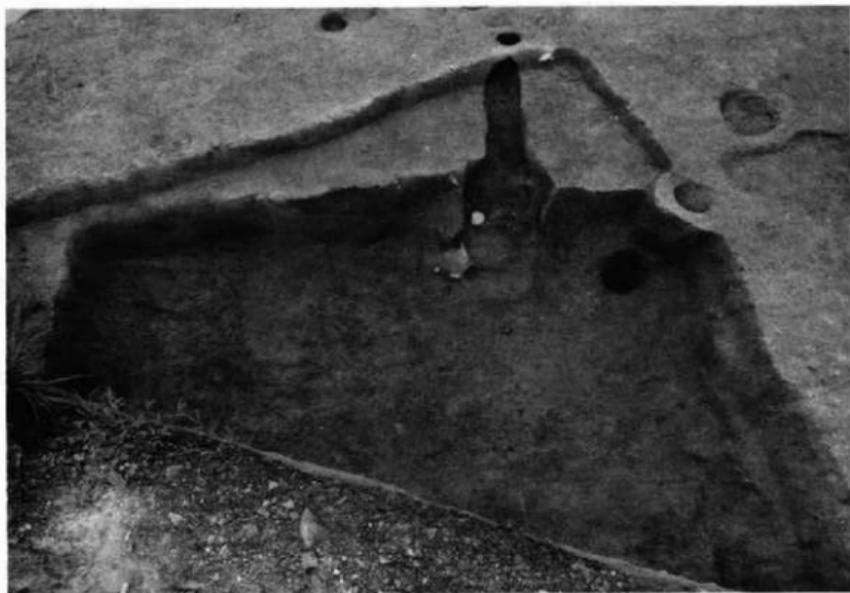
SK 1 (東より)



S H 5 (南東より)



S H 5 土器出土状況 (東より)



SH 7・8 (西より)



SH 8 カマド部 (西より)



S H 6 (北東より)



S E 1 (北より)



T 4 トレンチ全景（北東より）



T 4 トレンチ全景（南西より）



T 4 トレンチ造構群（北西より）



T 4 トレンチ造構群（北より）



T 4 トレンチ遺構群（南東より）



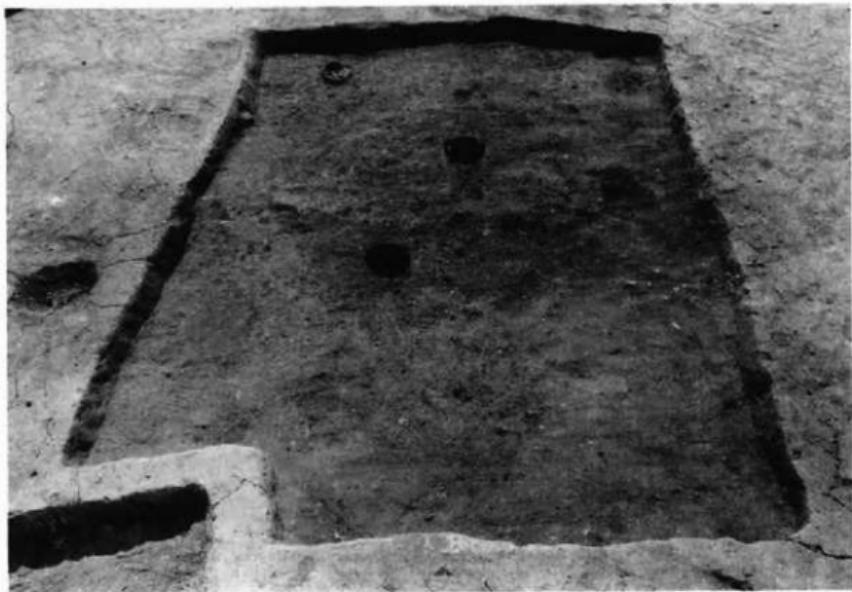
T 4 トレンチ遺構群（北東より）



S H 9 + 10 (南東より)



S H 10 (南西より)



S H 11 (北西より)



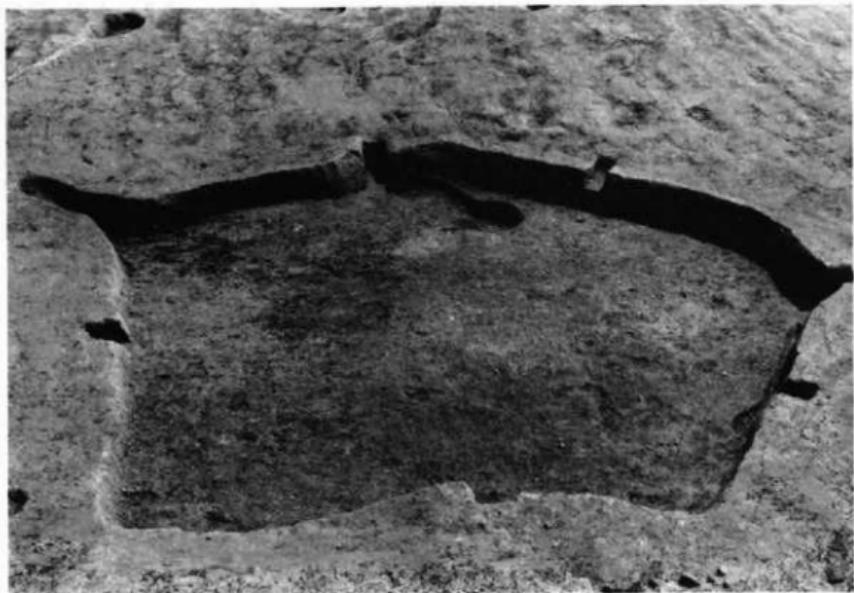
S K 3・4 (南より)



S H13 (西より)



S H13カマド部 (西より)



S H 15 (北西より)



S H 15カマド部 (南西より)



S H14・15 (南より)



S H14 (西より)



S H16・17 (南西より)



S H16・17 (南東より)



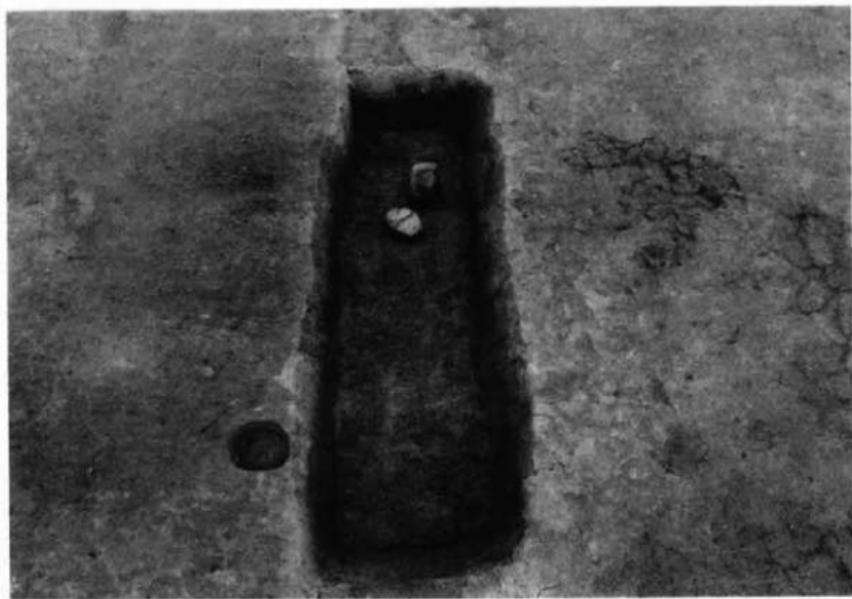
T 2 トレンチ上層遺構群（北東より）



T 2 トレンチ上層遺構群（南より）



S K 7 (南西より)



S K 7 完掘状況 (南西より)



S K 7 遺物出土状況（北西より）



S K 7 遺物出土状況（北西より）



S K 7 遺物出土状況（北西より）



S K 7 埋土堆積状況（南西より）



SK 6 検出状況（西より）



SK 6 遺物出土状況



T 2 トレンチ下層遺構群（北東より）



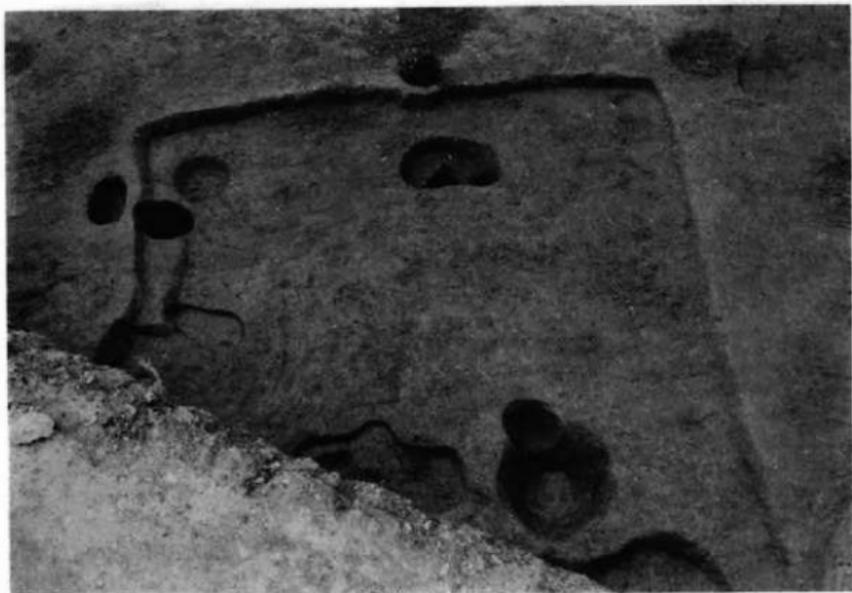
SK 8 (西より)



T 5 トレンチ全景（北東より）



T 5 トレンチ全景（南西より）



SH18 (東より)



SH18 (西より)



S H19（東より）



S H19貯藏穴土器出土状況（南西より）



S H 20 (東より)



S H 21 (北西より)



T 3 トレンチ造構群（北東より）



T 3 トレンチ全景（南より）



SB 1, SG 1 (南より)



SB 1 (南より)



S G 1 (南東より)



S K10・11 (南西より)



S B I P 9 断面 (北東より)



S B I P 7 断面 (北東より)



T 6 トレンチ全景（北東より）



T 6 トレンチ全景（南西より）



S K 9 埋土堆積状況（南西より）



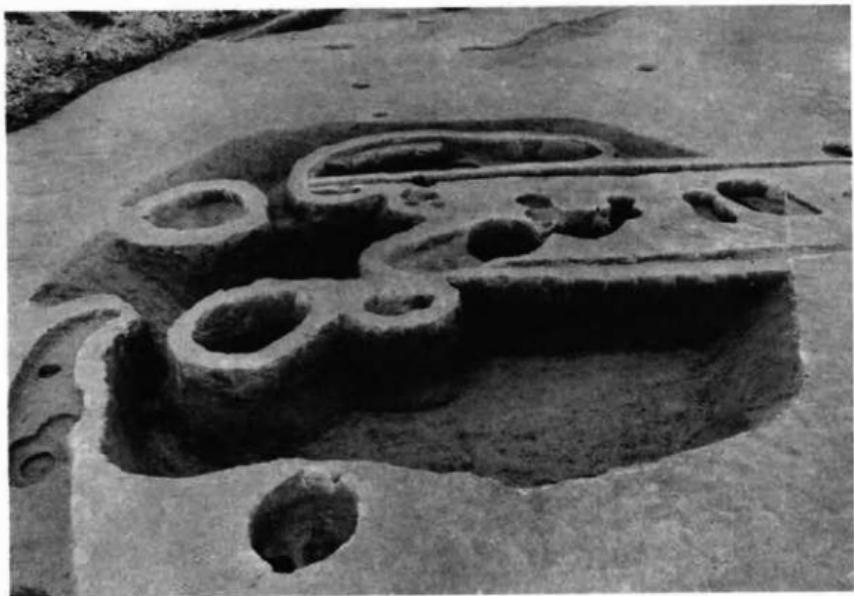
S K 12 (東より)



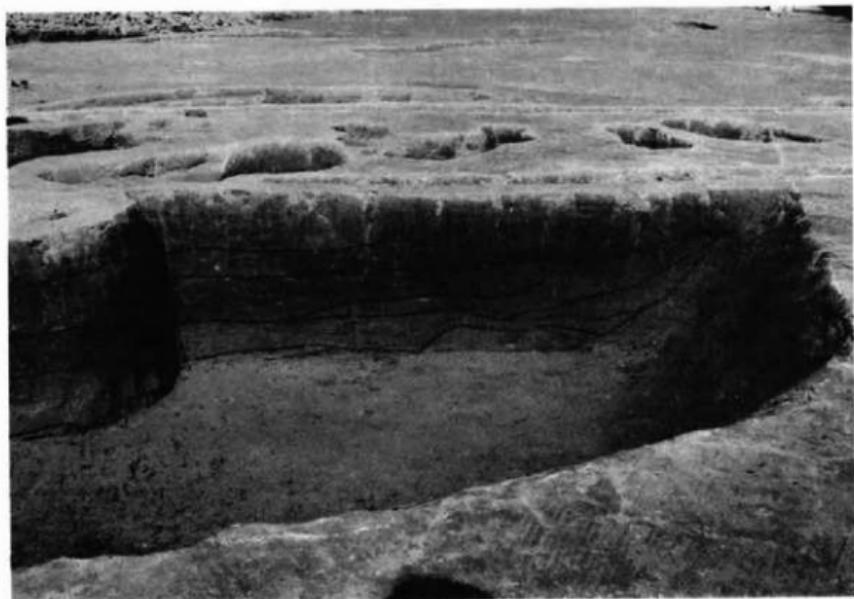
S B 2 (北より)



S B 2, S K13 (北西より)



S K13 (南より)



S K13埋土堆積状況 (南より)



試掘トレンチ7



試掘トレンチ8



試掘トレンチ9



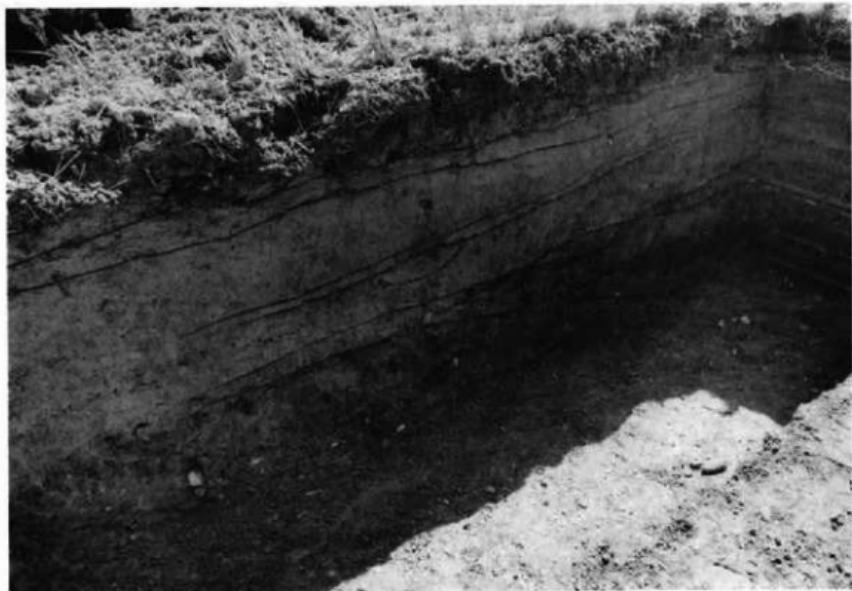
試掘トレンチ10



試掘トレンチ11



試掘トレンチ12



試掘トレンチ13



試掘トレンチ14



試掘トレンチ15



試掘トレンチ17



1



8



3



9



12



4



5



22



25



23



27



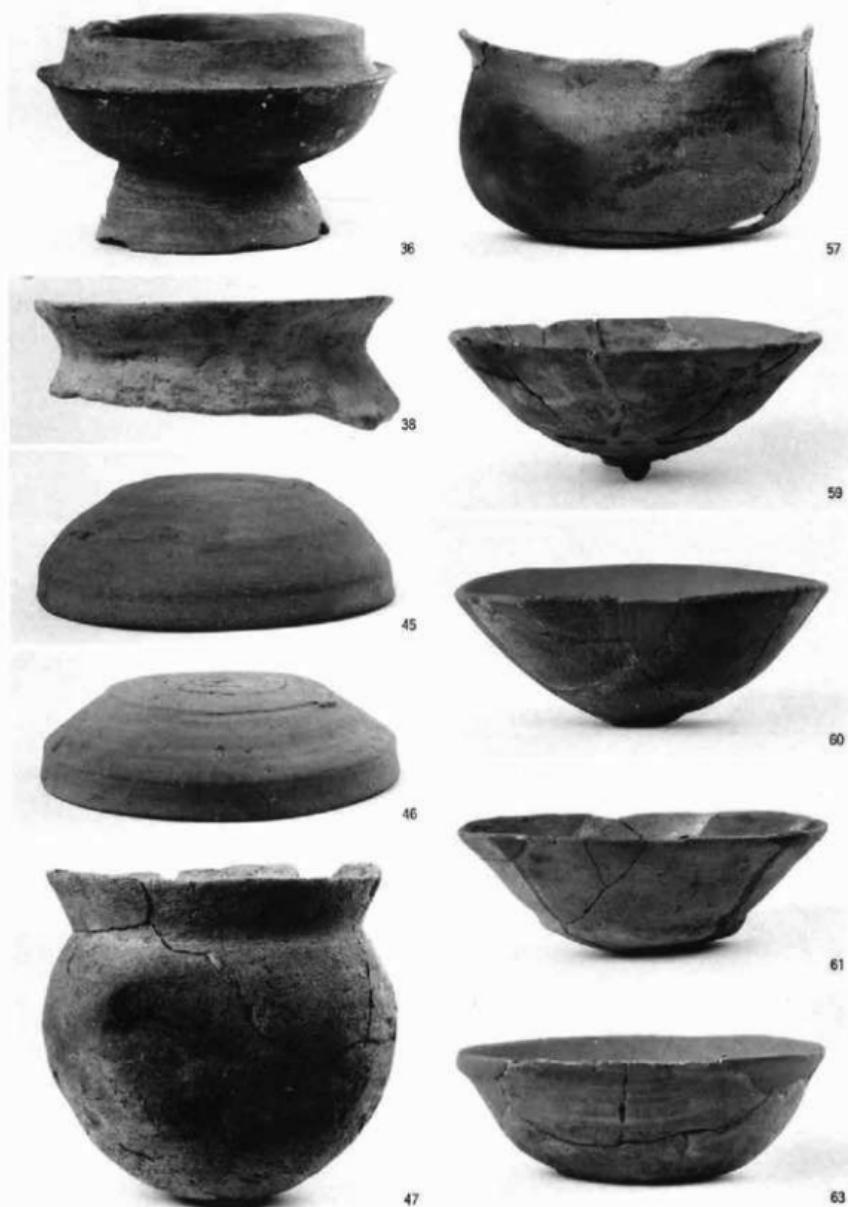
29



30

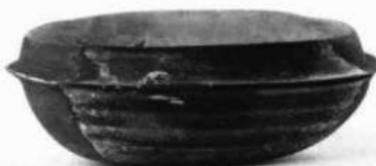


34

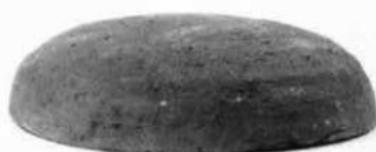




65



77



80



76



81



82



79



83



84



127



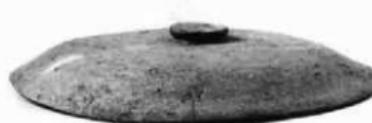
101



129



98



102



131



134



142



135



143



136



145



146



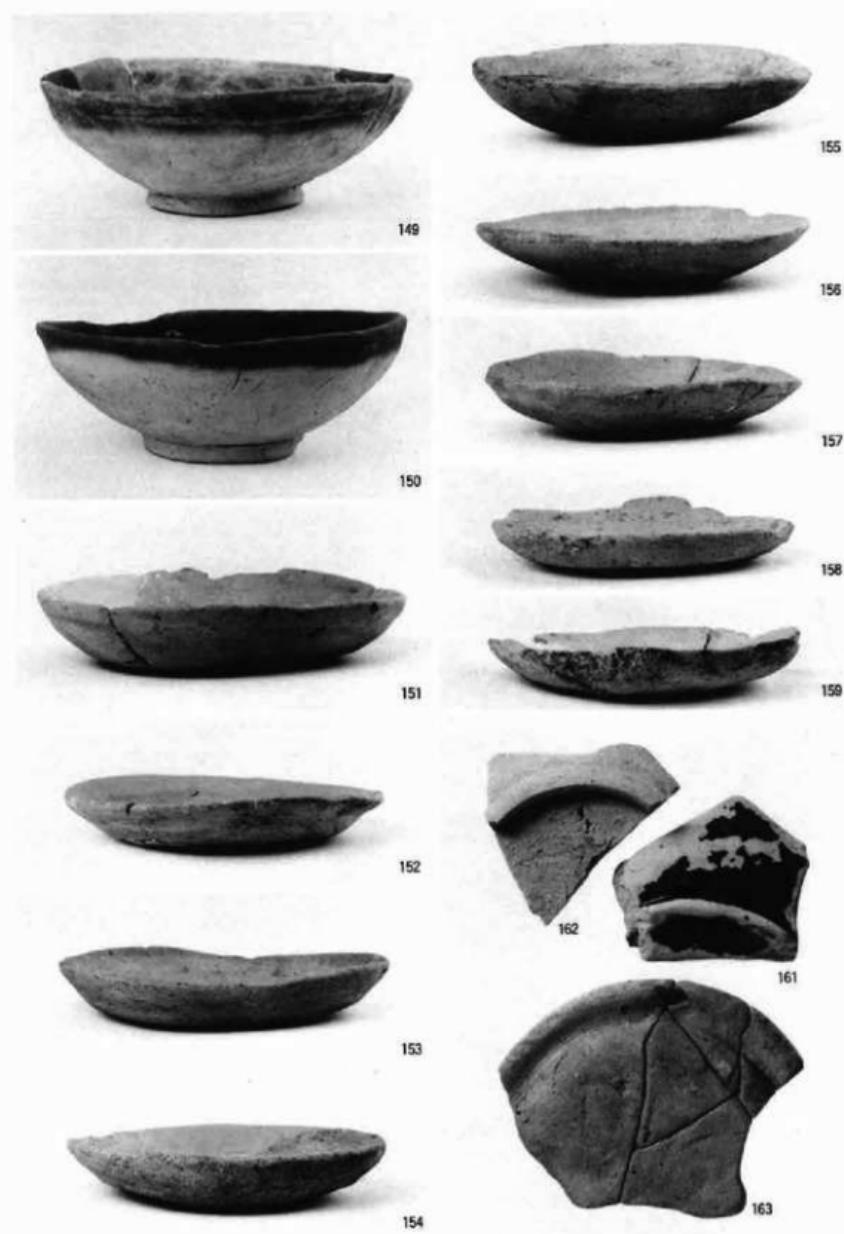
147



137



148





165



182



172



206



179



181



215



239



240

230



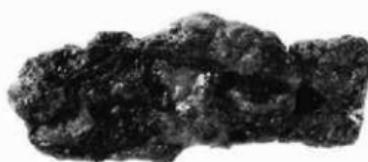
235



243



244



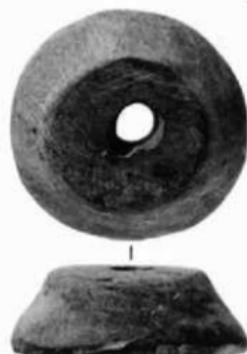
245



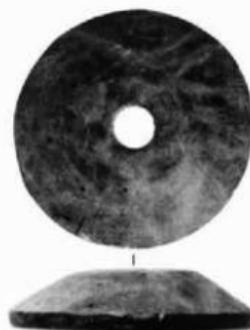
246



247



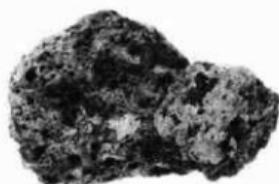
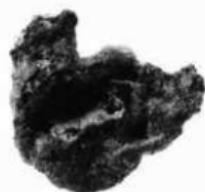
248



249



250



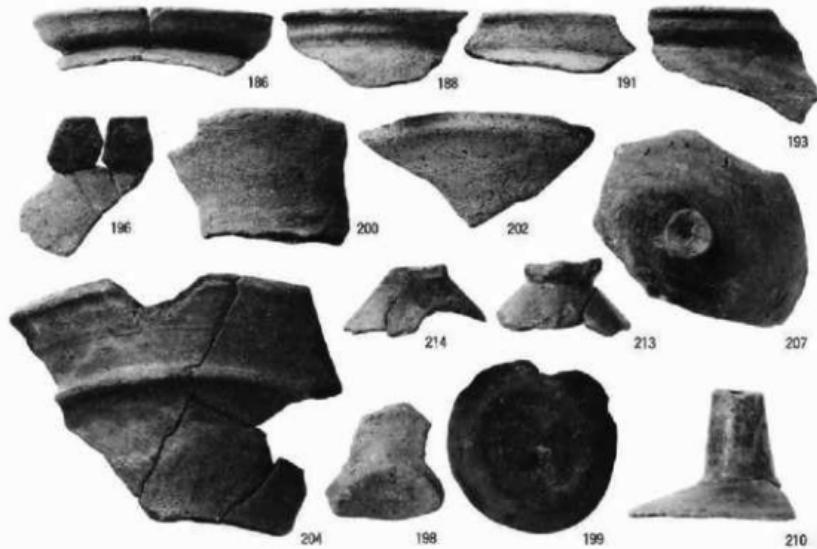
252



251



SK 5 出土遺物



落ち込み 2 底黑色土層出土土器

昭和62年3月

『琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う

栗東町高野遺跡発掘調査報告書』

編集発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬山南大嵐町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷製本 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

電話 075-351-6034